

雪御所遺跡
第5次調査
発掘調査報告書

2022
神戸市

雪御所遺跡
第5次調査
発掘調査報告書

2022
神戸市

序

古来より大輪田泊、兵庫津と呼ばれた兵庫の港に臨む兵庫区は、区内に貴重な文化財が多く所在し、豊かな歴史を有する街あります。

雪御所遺跡は、古来「平野」と呼ばれ平安時代末期に平家の別業が立ち並んでいたといわれた地域に所在しています。また、その町名が示すように、平家の別荘「雪御所」の比定地とされています。

今回は、旧湊山小学校のグランドであった地点で発掘調査を行うことになりました。調査では、平家一門が活躍した平安時代末期のみでなく、弥生時代後期から古墳時代の集落の存在を示す遺物が出土しました。

しかし、遺跡範囲に比べ調査件数が少なく、未だ知られていない歴史的な情報が、地中に多く残されているものと思われます。本書が地域の歴史研究、文化財の保護、普及啓発の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係者および地域住民のみなさまの多大なるご理解とご協力によって、実施することができましたことを厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

神戸市

例　言

1. 本書は、神戸市兵庫区雪御所町4番、5番1、28番3、28番4で実施した湊山小学校跡地利活用事業に伴う雪御所遺跡第5次調査の発掘調査報告書である。
2. この調査は、神戸市文化スポーツ局文化財課が株式会社村上工務店からの委託を受けて、現地調査を令和2年9月24日から令和2年11月26日、令和3年2月1日から令和3年2月12日、令和3年3月3日から令和3年3月11日にかけて実施したものである。また、神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、並びに発掘調査報告書の作成をおこなった。
3. 現地での調査は神戸市文化スポーツ局文化財課学芸員山口英正、加納大誉が担当した。保存科学調査は担当係長 中村大介、学芸員 山田侑生が行い、遺物整理は佐伯二郎、山田、遺物実測は加納が行った。本報告書の編集・執筆は加納が行った。ただし金属器の実測に関しては山田が行った。
4. 現地での遺構写真撮影は調査担当者が行い、空中写真撮影は安西工業株式会社が行った。遺物写真撮影は西大寺フォト杉本和樹氏が、神戸市埋蔵文化財センターにおいて行った。
5. 本書に記載した位置図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「神戸首都」を、調査地点の位置図は神戸市発行の1/2,500地形図「諒訪山」を使用した。
6. 本書に使用した方位・座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）で、標高は東京湾平均海水面（T.P.）で表示した。
7. 調査で出土した遺物および写真、図面等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
8. 発掘調査の実施及び本報告書の刊行に際しては、事業者である株式会社村上工務店に多大なるご協力を頂きました。記して御礼を申し上げます。

目次

目次

序

例言

目次

第1章 はじめに

第1節 今回の調査について

(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査体制	1
(3) 調査の経過	1

第2節 雪御所遺跡の地理的環境と歴史的環境

(1) 遺跡の地理的環境	2
(2) 遺跡の歴史的環境	4

第3節 雪御所遺跡における過去の調査

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定

第2節 基本層序

第3節 遺構

(1) 第1遺構面	15
(2) 第2遺構面	18

第4節 出土遺物

(1) 遺構に伴わない遺物	26
(2) 第1遺構面出土遺物	28
(3) 第2遺構面出土遺物	31

第3章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

(1) 古墳時代の遺構	44
(2) 平安時代の遺構	44

第2節 平安時代末期の雪御所遺跡周辺について

第3節 おわりに

挿図目次

第1図 雪御所遺跡の位置	第20図 SX203平・断面図
第2図 雪御所遺跡の位置	第21図 SX204平・断面図
第3図 調査地の位置	第22図 SX205平・断面図
第4図 雪御所遺跡周辺の主な遺跡	第23図 捣乱出土土器
第5図 雪御所遺跡と祇園遺跡における調査地	第24図 第1遺構面出土瓦
第6図 調査区区割図	第25図 SK101出土土器
第7図 調査区西壁・5次-1北壁断面図	第26図 SD101出土土器
第8図 SK101平・断面図	第27図 第2遺構面出土土器1)
第9図 第1遺構面平面図	第28図 第2遺構面出土土器2)
第10図 SD101平・断面図	第29図 第2遺構面出土石器
第11図 【?】SD101（南から）	第30図 SB201出土土器
第12図 第2遺構面平面図	第31図 SB202出土土器
第13図 SB201平・断面図	第32図 SB202出土鉄製品
第14図 SB201内側落ち込み平・断面図	第33図 SD201最終埋土出土土器
第15図 SB202平・断面図	第34図 SD201出土土器
第16図 SD201平・断面図	第35図 SK203出土鉄製品
第17図 SK203平・断面図	第36図 SK203出土器
第18図 SX201平・断面図	第37図 SX205出土土器
第19図 SX202平・断面図	

表目次

表1 雪御所遺跡における過去の調査一覧

写真図版目次

写真図版1 調査地遠景（北から）	
写真図版1 調査地遠景（南西から）	
写真図版2 1～8区第1遺構面全景（南から）	
写真図版3 SK101遺物出土状況（北から）	
SD101（北東から）	
写真図版4 1～8区、13～14区第2遺構面全景（空中写真、上が北）	
写真図版5 SB201（北から）	
SB201遺物出土状況（西から）	
写真図版6 SB202（南東から）	
SK203遺物出土状況（北から）	
写真図版7 SD201（北東から）	
SD201最終埋土遺物出土状況（南西から）	
写真図版8 9・10区第2遺構面全景（北から）	
9区SD201（東から）	
写真図版9 SK101出土遺物	
写真図版10 遺構に伴わない遺物	
写真図版11 第1遺構面出土瓦	
写真図版12 SB201出土遺物	
SB201出土遺物	
写真図版13 SB202出土遺物	
SB202出土遺物	
写真図版14 SK203出土遺物	
SD201出土遺物	
写真図版15 SD201最終埋土出土遺物	
SD201出土遺物	
写真図版16 SX205出土遺物	
第2遺構面出土遺物	
写真図版17 第2遺構面出土遺物	
第2遺構面出土遺物	
写真図版18 SB202・SK203出土鉄製品	

第1章 はじめに

第1節 今回の調査について

(1) 調査に至る経緯

今回の調査地は、神戸市兵庫区雪御所町4番、5番1、28番3、28番4に位置しており、湊山小学校跡地にある。また、神戸市埋蔵文化財分布図に記載されている雪御所遺跡の範囲に含まれている。今回の調査は、湊山小学校跡地利活用事業に伴うもので、新たに建物が建築されることにより、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について発掘調査を行った。道具、旧校舎解体工事等の工程の都合により、期間と場所を3回に分割して調査を実施し、それぞれ行った日付順に5次-1、5次-2、5次-3調査とした。

(2) 調査体制

令和2年度の現地調査、令和3年度の出土遺物整理・調査および報告書編集作業における組織は以下の通りである。

令和2年度

神戸市文化財保護審議会 史跡 考古資料担当

黒崎直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長

菱田哲郎 京都府立大学文学部教授

神戸市文化スポーツ局

局長 岡田健二

副局長 宮道成彦

文化財課長 安田滋

埋蔵文化財センター担当課長 前田佳久

埋蔵文化財係長 東喜代秀

担当係長 斎木巖 松林宏典 中村大介

事務担当学芸員 小林さやか

調査担当学芸員 山口英正 加納大誉

保存科学担当学芸員 中村大介 山田侑生

遺物整理担当学芸員 山田侑生

令和3年度

神戸市文化財保護審議会 史跡 考古資料担当

黒崎直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長

菱田哲郎 京都府立大学文学部教授

神戸市文化スポーツ局

局長 加藤久雄

副局長 宮道成彦

文化財課長 安田滋

埋蔵文化財センター担当課長 前田佳久

埋蔵文化財係長 東喜代秀

担当係長 橋詰清孝 松林宏典 中村大介

事務担当学芸員 小林さやか

報告書担当学芸員 加納大誉

保存科学担当学芸員 中村大介 山田侑生

遺物整理担当学芸員 佐伯二郎

(3) 調査の経過

調査は、現グランド整地層、旧グランド整地層、盛土、攢乱部分はバックホウで掘削し、それ以下は人力掘削で行った。

調査を行った日程は、5次-1調査は令和2年9月24日～11月26日、5次-2調査は令和3年2月1日～2月12日、5次-3は令和3年3月3日～3月11日である。

また、ドローンによる写真撮影及び写真測量を、5次-1調査は令和2年11月19日、5次-3調査は令和3年3月9日に実施した。

第2節 雪御所遺跡の地理的環境と歴史的環境

(1) 遺跡の地理的環境

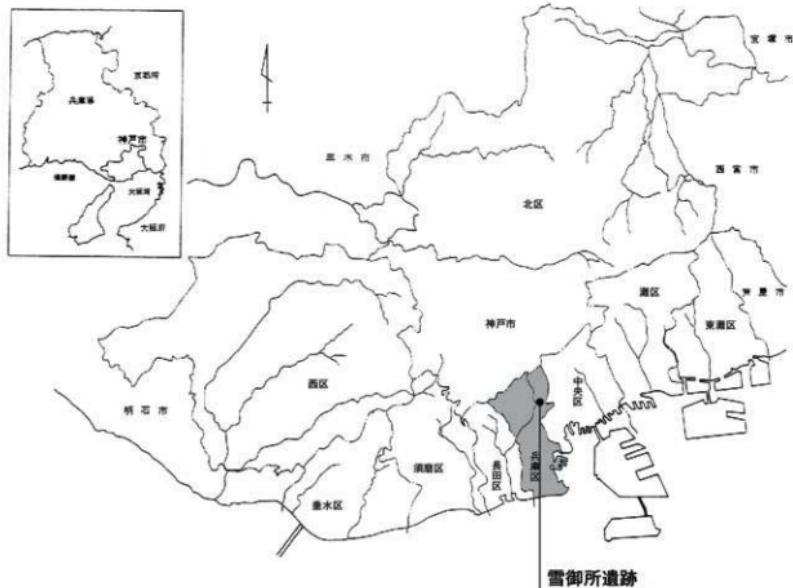
雪御所遺跡は、兵庫区湊山町・雪御所町に広がる、弥生時代から中世の複合遺跡である。

当遺跡の北側には、六甲山系の山地が広がっている。ここから、天王谷川や石井川などの河川が流れしており、複合扇状地を形成している。遺跡が立地しているのは、この複合扇状地扇頂部である。

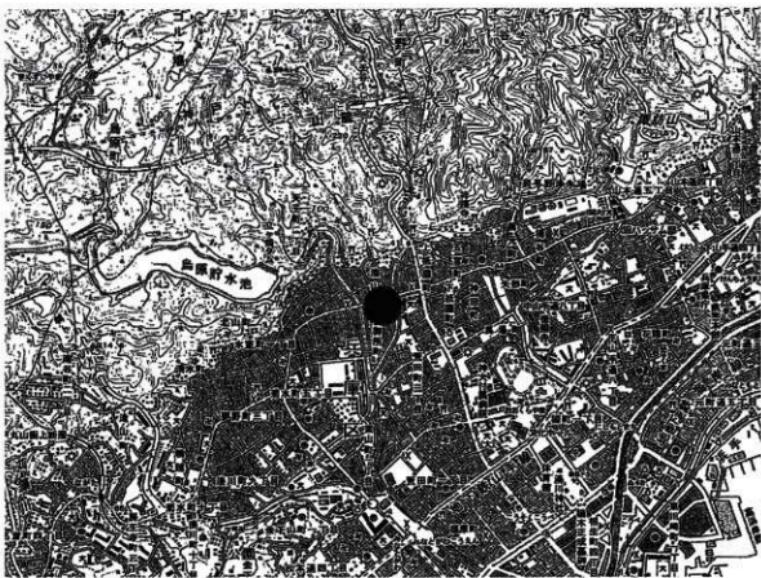
この複合扇状地は六甲山系の造山運動に伴って高燥・段丘化が進行し、現在の両河道は当該地周辺では扇状地を切り込み、流れている。そのため、両河道に挟まれた当遺跡は、島状の景観を呈している。そして、両河道はやがて合流し、新湊川となり、大阪湾へと注いでいる。

また、遺跡の南東には、大倉山や宇治野山といった丘陵があり、その隙間を縫うように宇治川が大きく蛇行し流れ、大阪湾へと注いでいる。

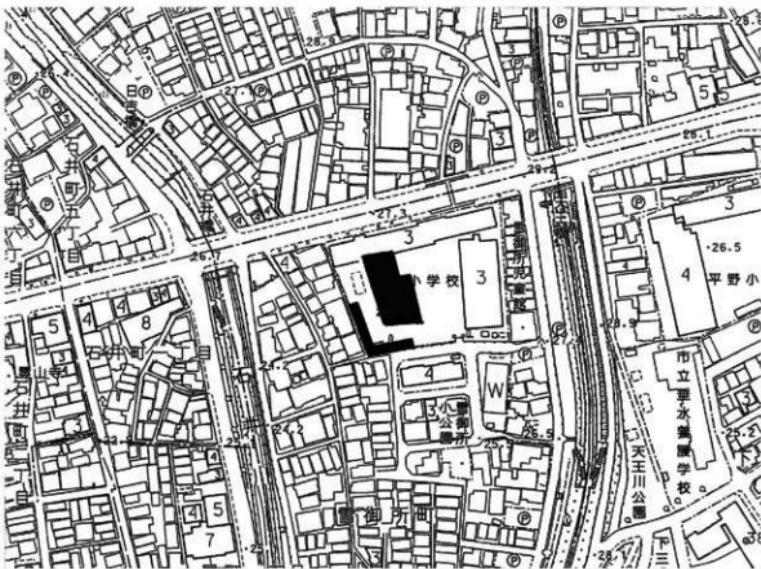
遺跡の周囲には、有馬街道沿いに鎮座する祇園神社の他に、東福寺、祥福寺、五宮神社など由緒ある寺社仏閣が点在している。



第1図 雪御所遺跡の位置



第2図 雪御所遺跡の位置 ($S=1:25,000$)



第3図 調査地の位置 ($S=1:2,500$)

(2) 遺跡の歴史的環境

雪御所遺跡の名称は、現在の地名によるものであるが、これは『山槐記』の「本皇居、神門家雪御所北也」や『平家物語』の一節「春は花見の岡の御所、秋は月みの浜の御所、・・・雪見の御所、萱の御所」に登場する平清盛の邸宅に由来すると考えられる。

この、雪御所遺跡の所在する兵庫区とその周辺では、各時代の遺跡が多く点在している。ここでは、時代ごとの主要な遺跡について触れていく。

旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺跡は少なく、昭和45年に会下山遺跡で、サスカイト製の国府型ナイフが採取されているのが知られているのみである。

縄文時代の遺跡については、住居址は見つかっていないが、遺構や遺物は確認されている。

宇治川南遺跡第1次調査では、縄文時代早期～晚期までの土器が出土した。その中には、縄文時代後期初頭の壠ノ内式や、晚期の大洞式土器が出土し、大分県腰高産の黒曜石が出土した。これらの資料は、当時の交流関係と文化の伝播を知る基礎資料となっている。また、石棒と土偶も出土しており特筆される。

楠・荒田町遺跡では、中期～晚期の遺構・遺物を確認した。第6次調査では、土坑から縄文時代後期の宮滝式期の深鉢2個体、注口土器と共にドングリ類の実の皮が出土した。第16次調査では、土坑、貯蔵穴が確認され、縄文時代後期～晚期の複数型式の土器が出土した。第38次調査では、土坑から縄文時代後期中頃の土器とサヌカイト片、石錐10点が出土した。第47次調査では、縄文時代後期の土坑・溝が確認され、同時期の土器が出土した。

上沢遺跡第1次調査では、自然流路から縄文時代晚期の長原式土器が出土し、落ち込みからは、縄文時代後期の北白川上層式の土器が出土した。

長田神社境内遺跡第1次調査では、縄文時代晚期後半の遺物が出土し、滋賀里IV式に属する土坑を確認した。

五番町遺跡第5次調査では、縄文時代後期の北白川上層式深鉢、縄文時代晚期後半の舟形土器が出土した。第10次調査では、縄文時代晚期にあたる船橋併行期の土器が出土した。

弥生時代

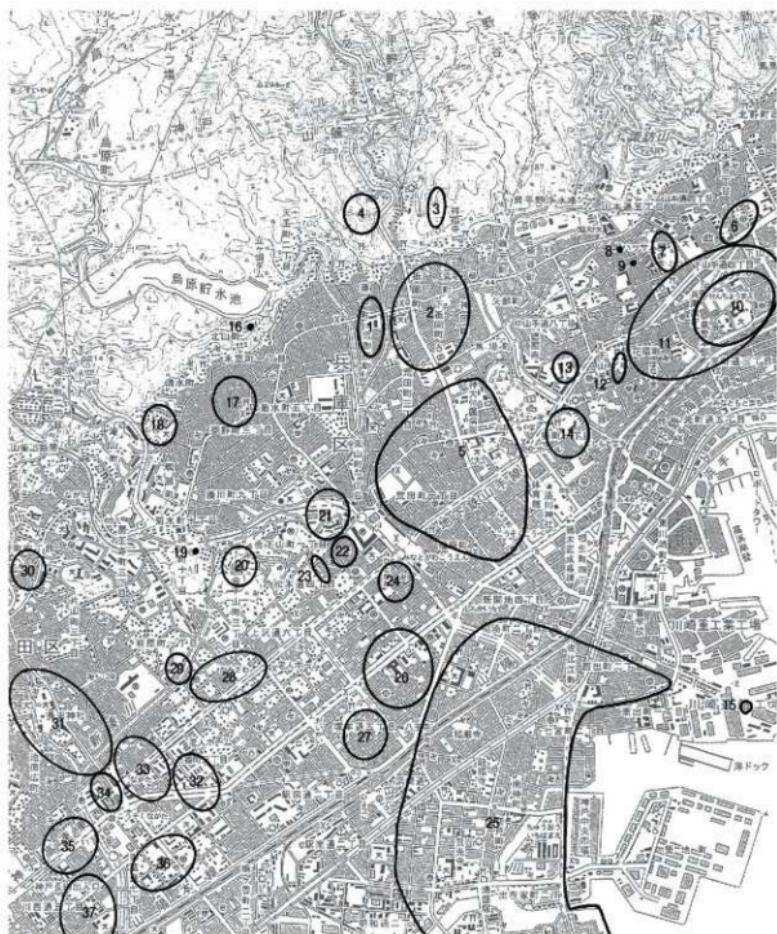
弥生時代前期の集落として、大開遺跡がある。第1次調査で、前期前半の環濠集落を確認しており、環濠内外で竪穴建物5棟を確認した。第3次調査では、前期後半の竪穴建物3棟を確認し、第5次調査では前期後半の環濠から多数の木製品が出土した。

楠・荒田町遺跡では、弥生時代前中期～中期の集落跡を確認した。第1次調査では、計30基の貯蔵穴を検出し、銅鐸の鋳型も出土した。第6・17・20・32・45次調査では、中期の方形周溝墓を確認した。第1・5・32・45次調査では竪穴建物を、第5・16次調査では掘立柱建物を確認した。

上沢遺跡からは、弥生時代後期の遺構を確認した。第16・19・33・51次調査では、竪穴建物を確認し、第4次調査では溝から、大量の土器が出土した。

また、長田神社境内遺跡では、第1次調査で後期後半の竪穴建物4棟、掘立柱建物3棟を検出し、土器棺墓等を確認した。第5・12次調査では、後期の竪穴建物数棟を確認しており、第10次調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物9棟を確認し、小型彷彿鏡が出土した。

祇園遺跡では、中期後半～後期の竪穴建物を確認した。第14次調査では、中期後半の竪穴建物4棟を確認した。建物のなかには、所謂1〇（いちまる）土坑を持つものや、焼失住居とみ



第4図 雪御所遺跡周辺の主な遺跡 (S=1:25,000)

- | | | | | |
|-------------|---------------|--------------|--------------|-----------|
| 1. 雪御所遺跡 | 9. 中宮古墳(消滅) | 17. 河原遺跡 | 25. 兵庫津遺跡 | 33. 五番町遺跡 |
| 2. 桧園遺跡 | 10. 旧三の宮駅構内遺跡 | 18. 熊野遺跡 | 26. 大開遺跡 | 34. 長田南遺跡 |
| 3. 桧園神社裏山遺跡 | 11. 花隈城跡 | 19. 会下山二本松古墳 | 27. 塚本遺跡 | 35. 御船遺跡 |
| 4. 天王谷遺跡 | 12. 下山手遺跡 | 20. 会下山遺跡 | 28. 上沢遺跡 | 36. 御蔵遺跡 |
| 5. 楠・荒田町遺跡 | 13. 下山手北遺跡 | 21. 東山遺跡(消滅) | 29. 室内遺跡 | 37. 神楽遺跡 |
| 6. 中山手遺跡 | 14. 宇治川南遺跡 | 22. 兵庫松本遺跡 | 30. 名倉遺跡 | |
| 7. 中山手西遺跡 | 15. 渋川砦台跡 | 23. 兵庫松本西遺跡 | 31. 長田神社境内遺跡 | |
| 8. 中宮黄金塚古墳 | 16. 夢野丸山古墳 | 24. 渋川遺跡 | 32. 三番町遺跡 | |

られるものがある。

古墳時代

この地域で前期に築造された古墳は、夢野丸山古墳と会下山二本松古墳がある。夢野丸山古墳は標高約110mの丘陵先端部に立地し、堅穴石室から重列式神獸鏡や銅鏡、鉄鏡、直刀、剣が出土した。会下山二本松古墳は、全長55mの前方後円墳で、墳丘は二段築成で葺石が存在していることが判明している。

後期に築造された古墳は、中宮古墳と中宮黄金塚古墳がある。中宮黄金塚古墳は直径10mの円墳で、主体部は両袖式の横穴式石室である。

兵庫松本遺跡では、弥生時代末期～古墳時代初頭の堅穴建物20棟以上、掘立柱建物10棟をこれまでの調査で確認した。また、他地域の要素を持つ土器が出土しており、集落間の交流を考えるうえで貴重な資料である。

上沢遺跡第10次調査では、古墳時代中期の堅穴建物5棟、大壁造り建物2棟を確認した。また、鉄製品、滑石製品、ガラス玉、製塩土器、韓式系土器が出土しており、渡来人との関係を指摘された。

祇園遺跡では、第1・7・15次調査で、弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴建物をそれぞれ1棟確認した。また、第14次調査では、古墳時代前期の堅穴建物を1棟確認した。

長田神社境内遺跡第5次調査では、古墳時代初頭の堅穴建物5棟、前期の堅穴建物5棟、中期以降の掘立柱建物1棟、後期の堅穴建物1棟を確認した。第14次調査では、前期の溝から、大量の土器が出土し、後期～飛鳥時代の掘立柱建物を確認した。

神楽遺跡第3次調査では、中期の掘立柱建物や堅穴建物を確認し、韓式系土器や滑石製紡錘車が出土した。第4次調査では、中期の井戸より滑石製勾玉、双孔円盤、白玉が出土し、祭祀に関する遺構であると考えられる。第2・7次調査では、後期の堅穴建物や掘立柱建物を確認した。

飛鳥時代

下山手北遺跡第2次調査では、掘立柱建物7棟を確認した。また、御蔵遺跡第51次調査では流路と、構造構を確認した。斎申を含む多量の木製品と帶金具が出土した。

奈良時代

上沢遺跡第31次調査では、井戸組の井戸から銅鏡や鉄製紡錘車が出土した。また、墨書土器、円面硯、金属製帶金具、銅製絞具、重圓文軒丸瓦、土馬、銅の溶解炉片等の遺物も出土した。第4・5・9・10・30次調査では掘立柱建物を確認した。第4次調査では、半裁した丸太を削りぬいて製作された井戸を確認し、第5次調査では銅製帶金具が出土した。第56次調査では、奈良時代の瓦が出土しており、隣接する室内遺跡でも、瓦や塑像が出土したことから、この付近に存在した「房王寺」に関連するものであると考えられている。

御蔵遺跡第2次調査では、奈良時代後期の掘立柱建物3棟と井戸を確認した。第3次調査では掘立柱建物11棟、第9次調査では掘立柱建物4棟を確認した。第59次調査では、和同開珎や銅製巡方が出土した。

平安時代

下山手北遺跡第1次調査では、平安時代前期の園池と掘立柱建物群を確認した。遺構の配置から、貴族の邸宅であると考えられる。また、「長年大宝」が計59枚出土したため、9世紀中葉に存在していたと考えられる。

御藏遺跡第29次調査では、建築部材を転用した井戸を確認しており、白磁や緑釉陶器、「富寿神宝」、「寛平大宝」が出土した。第27次調査においても、遺物包含層から「富寿神宝」が3枚重なって出土した。第28次調査では観や緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、第37次調査では青白磁合子や帶金具が出土した。また、第14次調査では、井戸から「大殿」と墨書きされた曲物が出土した。第57次調査では、平安時代と考えられる掘立柱建物3棟を確認した。

神楽遺跡では、第1次調査で平安時代中期の溝を確認しており、須恵器・土師器・黒色土器とともに、緑釉陶器や灰釉陶器が出土した。また、「東福」と記された墨書き土器も出土した。第4次調査では、正方位に建てられた大型の掘立柱建物を確認した。

上沢遺跡では、第4次調査で平安時代中期と後期の掘立柱建物を確認し、平安時代の流路を確認した。第9次調査では、平安時代後期の掘立柱建物2棟と井戸を確認しており、第42次調査では平安時代の大型掘立柱建物を確認している。また、第19次調査では緑釉陶器皿が出土した。

楠・荒田町遺跡神戸大学医学部附属病院構内の調査では、平安時代後期の二重の濠や建物群を確認した。検出した建物には、大型の柱掘形をもつ掘立柱建物やL字形に配列された建物なども存在する。

祇園遺跡では、第2・5・15次調査で、石敷を伴う12世紀後半の園池遺構を確認した。園池には、導水路や排水路と考えられる施設を伴い、京都系土師皿や山城系瓦が出土した。また、第18次調査では、同方向に並ぶ掘立柱建物8棟、区画溝、園池遺構、石組遺構、道路遺構を検出した。

中世以降

楠・荒田町遺跡では第16次調査で、平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物10棟や欄列を確認しており、石帯が出土した。第53次調査では、平安時代末期～鎌倉時代初頭の掘立柱建物3棟、木棺墓2基、鎌倉時代の掘立柱建物1棟、土壙墓1基を確認した。墓からは、青磁碗、青白磁合子、鉄刀子、和鏡等が出土した。第19次調査では中世の掘立柱建物群を確認した。第54次調査では、明治時代の煉瓦積建物基礎・八角形煙突・煙道等を確認しており、焼寸工場の一部であることを確認した。

長田神社境内遺跡では、第1次調査で平安時代末期の木棺墓や鎌倉時代頃の井戸3基を確認した。第6・10次調査では、中世の掘立柱建物を確認し、第7次調査では、戦国時代の方形区画や近世の長田神社の神官屋敷跡を確認した。また、第14次調査では、福聚寺の旧本堂の基壇跡を確認し、近世の水琴窟を伴う軒先手水鉢が出土した。

花隈城跡では、第1次調査で野面積みの石垣を確認しており、第3次調査では、16世紀後半の瓦が出土した。

兵庫津遺跡第57・62次調査では兵庫城の石垣を確認した。

参考文献

祇園遺跡

『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1996

『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1997

富山直人編『祇園遺跡第5次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2000

『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999

- 『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001
- 『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2002
- 『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2007
- 『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2008
- 内藤俊哉編『紙園遺跡第14次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2013
- 阿部功編『紙園遺跡第15次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2013
- 『平成24年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2015
- 内藤俊哉編『紙園遺跡第17・18次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2016
- 『平成25年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2016
- 川上厚志・岡田健吾編『紙園遺跡第21次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2016
- 楠・荒田町遺跡
- 丸山潔編『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1980
- 「楠・荒田町遺跡」「昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1988
- 丸山潔編『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会 1990
- 「楠・荒田町遺跡 第11次調査」「楠・荒田町遺跡 第12次調査」「平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1995
- 「楠・荒田町遺跡 第13次調査」「平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1997
- 岡田章一編『楠・荒田町遺跡』兵庫県文化財調査報告第162冊 兵庫県教育委員会1997
- 別府洋二編『楠・荒田町遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第339冊 兵庫県教育委員会2008
- 「楠・荒田町遺跡 第38次調査」「平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2009
- 富山直人・小林さやか編『楠・荒田町遺跡 第42・43・46次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2011
- 「楠・荒田町遺跡 第45次調査」「平成21年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2012
- 「楠・荒田町遺跡 第47次調査」「平成22年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2013
- 閑野豊編『楠・荒田町遺跡 第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2014
- 黒田恭正編『楠・荒田町遺跡 第54次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2014
- 中宮黄金塚古墳
- 「中宮黄金塚古墳」「昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1994
- 花隈城跡
- 「花隈城跡 第1次調査」「平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2006
- 「花隈城跡 第3次調査」「平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2009
- 下山手北遺跡
- 「下山手北遺跡 第2次調査」「平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2008
- 宇治川南遺跡
- 「宇治川南遺跡」「昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1986
- 会下山二本松古墳
- 「会下山二本松古墳」「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1987
- 会下山遺跡
- 喜谷美宜「旧石器・縄文時代」「新修神戸市史 歴史編I 自然・考古」神戸市1989
- 兵庫松本遺跡
- 中谷正編「兵庫松本遺跡 第2～4・12・17・19次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2011
- 大間遺跡
- 前田佳久編「大間遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会1993
- 「大間遺跡 第3次調査」「平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1995
- 「大間遺跡 第7次調査」「平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1999

山田裕生編『大開遺跡 第14次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2014

上沢遺跡

阿部敬生編『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1995

「上沢遺跡 第3次調査」「上沢遺跡 第4次調査」「平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1999

「上沢遺跡 第9次調査」「上沢遺跡 第15次調査」「平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2000

「上沢遺跡 (第16・19・20・24・28・29・30次調査)」「平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2001

「上沢遺跡 第32次- 1・2調査」「上沢遺跡 第33次調査」「平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2002

「上沢遺跡 (第37・39・42・43・44次調査)」「平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2003

「上沢遺跡 第42次調査」「平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2003

「上沢遺跡 第51次調査」「平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2005

小林さやか編『上沢遺跡第55次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2009

「上沢遺跡 第56次調査」「平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2011

室内遺跡

水口富夫他「室内遺跡」「平成9年度年報」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1998

長田神社境内遺跡

黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会1990

「長田神社境内遺跡 第5次調査」「平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1994

「長田神社境内遺跡 第6次調査」「平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1995

「長田神社境内遺跡 第7次調査」「平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1995

「長田神社境内遺跡 第10次調査」「平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2000

「長田神社境内遺跡 第12次調査」「平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2001

「長田神社境内遺跡 第14次調査」「平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2003

御歳遺跡

「御歳遺跡 第2次調査」「御歳遺跡 第3次調査」「平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2000

山田清朝編『御歳遺跡 第8・9・10次調査』神戸市教育委員会2000

安田滋編『御歳遺跡 第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001

富山直人他編『第5・7~13・18~22・24・28・29・31~36・39・41・43次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2003

谷正俊編『御歳遺跡 V 第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会2003

「御歳遺跡 第51次調査」「平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2005

「御歳遺跡 第57次調査」「平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2008

「御歳遺跡 第59次調査」「平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2009

五番町遺跡

「五番町遺跡 第5次調査」「平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1997

「五番町遺跡 第10次調査」「平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2003

神楽遺跡

齊木宏明編『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1981

「神楽遺跡」「昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1986

「神楽遺跡」「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1987

「神楽遺跡」「昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1989

「神楽遺跡」「平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1994

第3節 雪御所遺跡における過去の調査

雪御所遺跡の調査は、昭和61年度に第1次調査がおこなわれて以来、今回の調査で5次を数える。過去の調査では、弥生時代末期～平安時代後期の遺構や遺物を確認した。ここでは、調査次数ごとに過去の調査成果を振り返っておく。

第1次調査

南西から北西に延びる石列・石垣遺構を検出した。構築方法からは、構築時期は特定できないが、裏込からは平安時代後期の土師器・瓦を若干包含していた。その他、弥生時代後期の土器と平安時代末期の土師器・須恵器が出土した。

また、この調査段階で、仮設プレハブ基礎工事の際、盛土直下で弥生土器が出土しており、集落跡が確認される可能性が極めて高いと考えられた。

第2次調査

第1次調査地西側で、物理探査（地中レーダー探査）を行い、そのデータに基づき第1次調査で確認した石垣が、南側に延びると想定され、調査が実施された。その結果、石垣の続きを確認出来、更に南側にも延びることを確認した。第1次調査では、近世以降の石垣であろうと考えていたが、石垣の西側の整地土に含まれていた遺物が中世後半にまで遡るものであったことから、中世後半以降の石垣であるとされた。

第1次調査同様、平氏の雪御所関連遺構は、確認出来なかった。

第3次調査

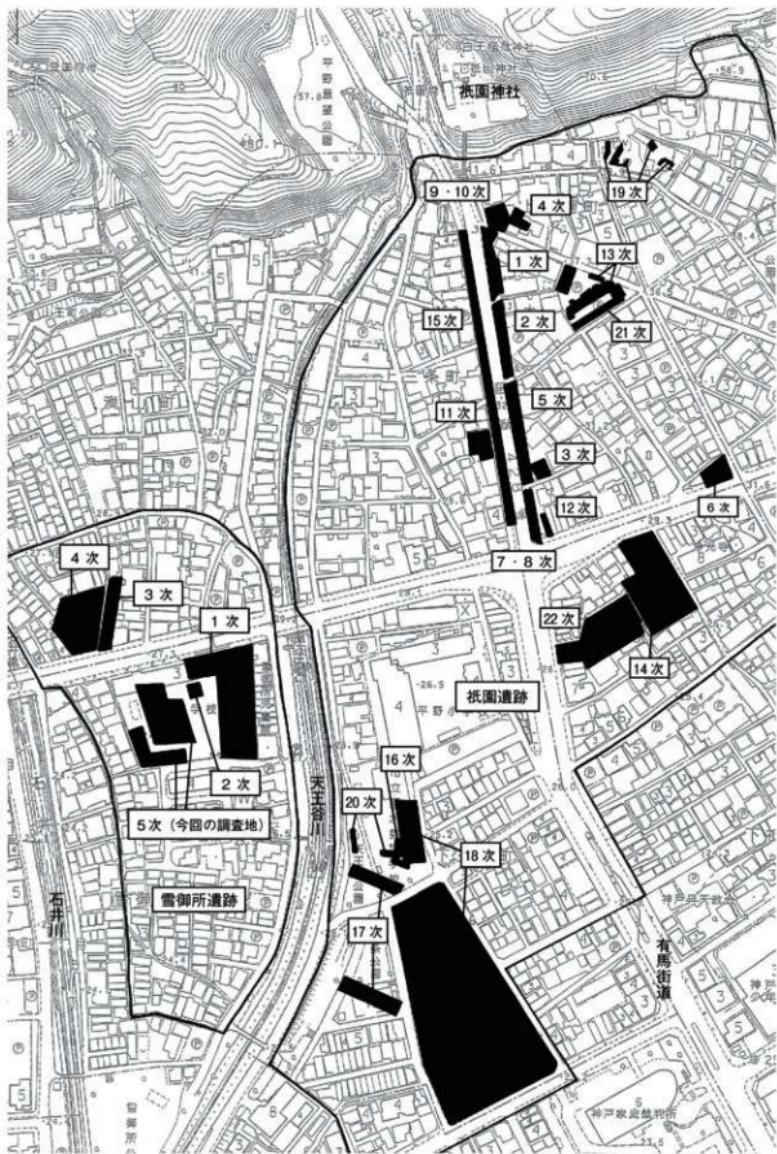
湊山小学校の北西に位置し、マンション建設に伴い実施した。この調査では、弥生時代末期の竪穴建物1棟、溝1条を確認した。また、平安時代末期の用途不明遺構を1基検出した。

第4次調査

第3次調査地の西側隣接地点で、古墳時代前期の竪穴建物4棟、古墳時代中期の竪穴建物1棟、古墳時代後期の竪穴建物2棟検出した。また、鎌倉時代初頭の遺構と考えられる用途不明遺構1基を検出した。

参考文献

- 『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1989
- 『平成24年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2015
- 『平成25年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2016



第5図 雪御所遺跡と祇園遺跡における調査地 (S=1:3,000)

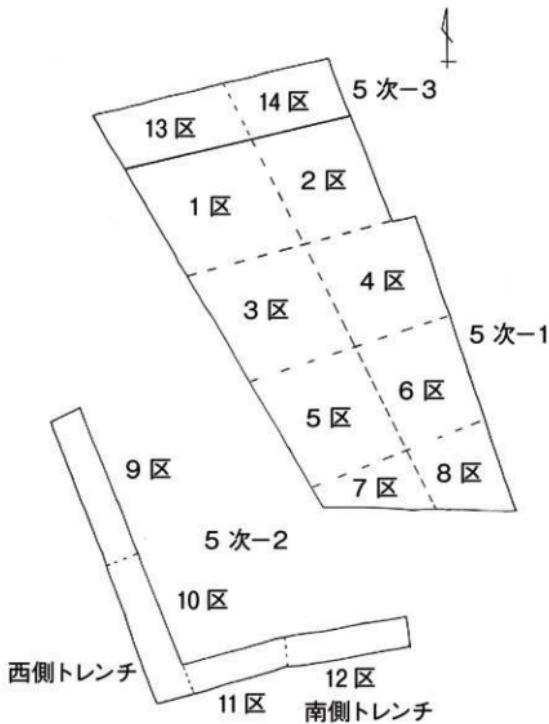
次数	調査地	調査期間	面積	主な成果
1	兵庫区雪御所町2	昭和62年1月12日～昭和62年2月25日	約1600m ²	南西から北西に延びる石列・石垣遺構、弥生時代後期の弥生土器、須恵器、土師器、瓦
2	兵庫区雪御所町2	平成24年7月17日～平成24年8月22日	約55m ²	1次調査で確認した石垣遺構の続き
3	兵庫区湊山町22番3	平成24年8月8日～平成24年9月4日	約200m ²	弥生時代末期の竪穴建物1棟、溝1条、平安時代末期の用途不明遺構1基
4	兵庫区湊山町22番3	平成25年9月12日～平成25年11月8日	約700m ²	古墳時代前期の竪穴建物4棟、古墳時代中期の竪穴建物1棟、古墳時代後期の竪穴建物2棟、鎌倉時代初頭の用途不明遺構1棟
5	兵庫区雪御所町4番、5番1,28番3,28番4	令和2年9月24日～令和2年11月26日 令和3年2月1日～令和3年2月12日 令和3年3月3日～令和3年3月11日	5次-1 約1226m ² 5次-2 約120m ² 5次-3 約100m ²	平安時代末期の土坑・溝、飛鳥時代の溝、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物2棟

表1 雪御所遺跡における過去の調査一覧

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定（第6図）

第1章に記したように、工事の都合上期間を3回に分けて調査を実施した。5次-1では調査区を8区に分け、5次-2では敷地の南西側にトレンチを北から4区に分け、5次-3では2区に分けて設定し調査を進めた。本書ではこれらを一括して報告する。



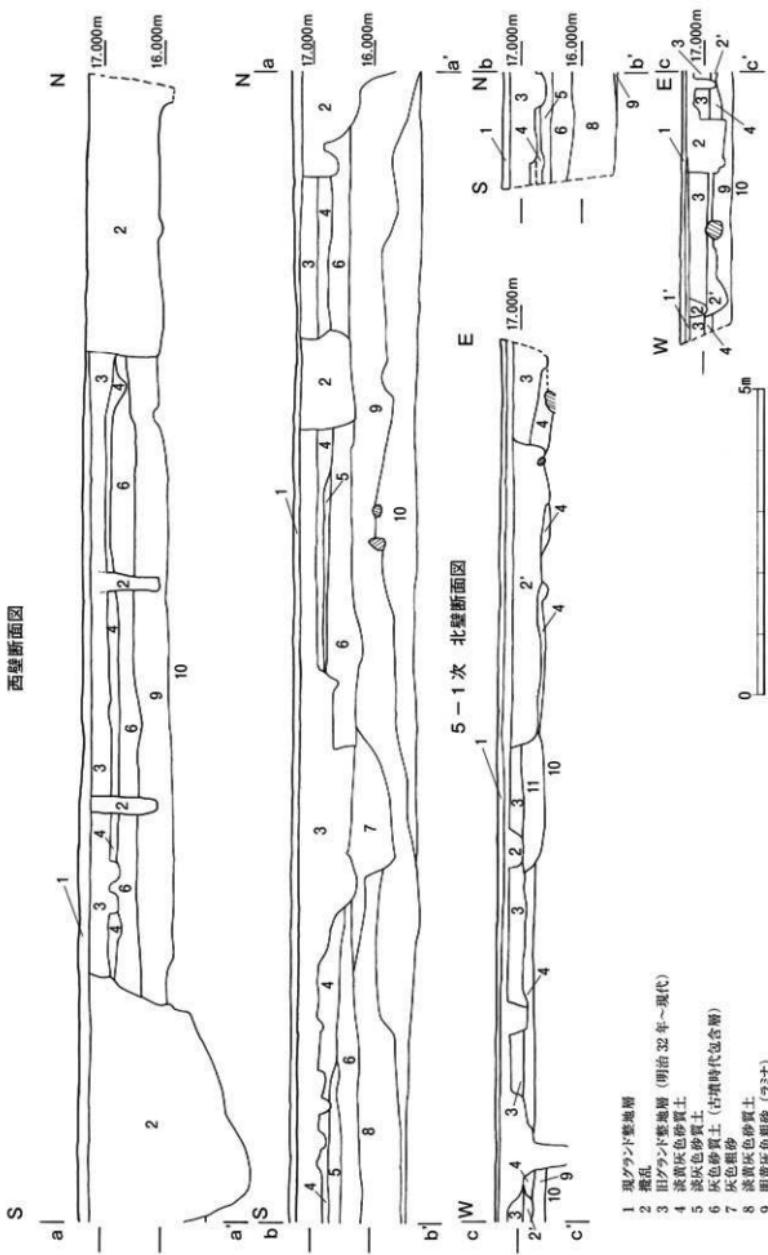
第6図 調査区区割図

第2節 基本層序（第7図）

基本層序は、1区西壁北端部では現地表面T.P.17.3mで、上層から現グランド整地層、淡黄灰色砂質土（上面が第1遺構面、T.P.16.9m）、灰色砂質土（古墳時代遺物包含層）、淡灰色砂質土（上面が第2遺構面、T.P.16.4m）となっている。

また、7区西壁南端部では淡灰色砂質土上面が北部より約10cm低くなっている。古墳時代の遺構面は北西から南東へと土地が傾斜している。

西壁斷面圖



第7図 調査区西壁・5次-1北壁断面図(S=1:80)

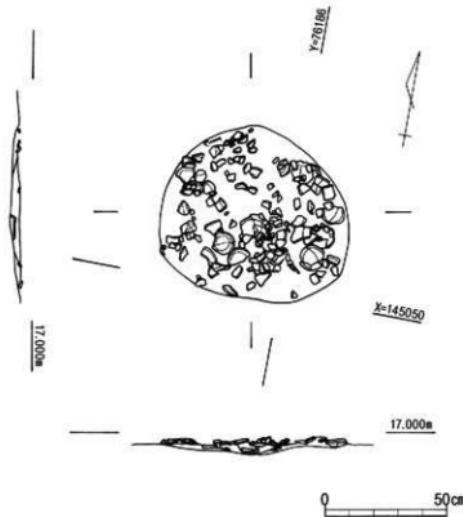
第3節 遺構

(1) 第1遺構面 (第9図)

第1遺構面では、南北に延びる溝1条、土師器皿を70枚以上含む土坑1基を検出した。5次-1、5次-2で調査した9~14区については後世の攪乱により遺構面は残っていなかった。

土坑 SK101 (第8図)

直径約75cm、検出面からの深さは約8cmの円形の土坑であり、70枚以上の土師器皿が、一部重なった状態で出土した。完形に近いものも7点出土した。遺構の時期は、12世紀末から13世紀初頭頃と考えられる。平清盛が福原遷都を行った時期に重なるが、この土器溜り遺構の他に当該期の遺構はSD101以外確認できなかった。祇園遺跡においても、同時期の土師器皿が出土した土器溜りが数か所確認されている。

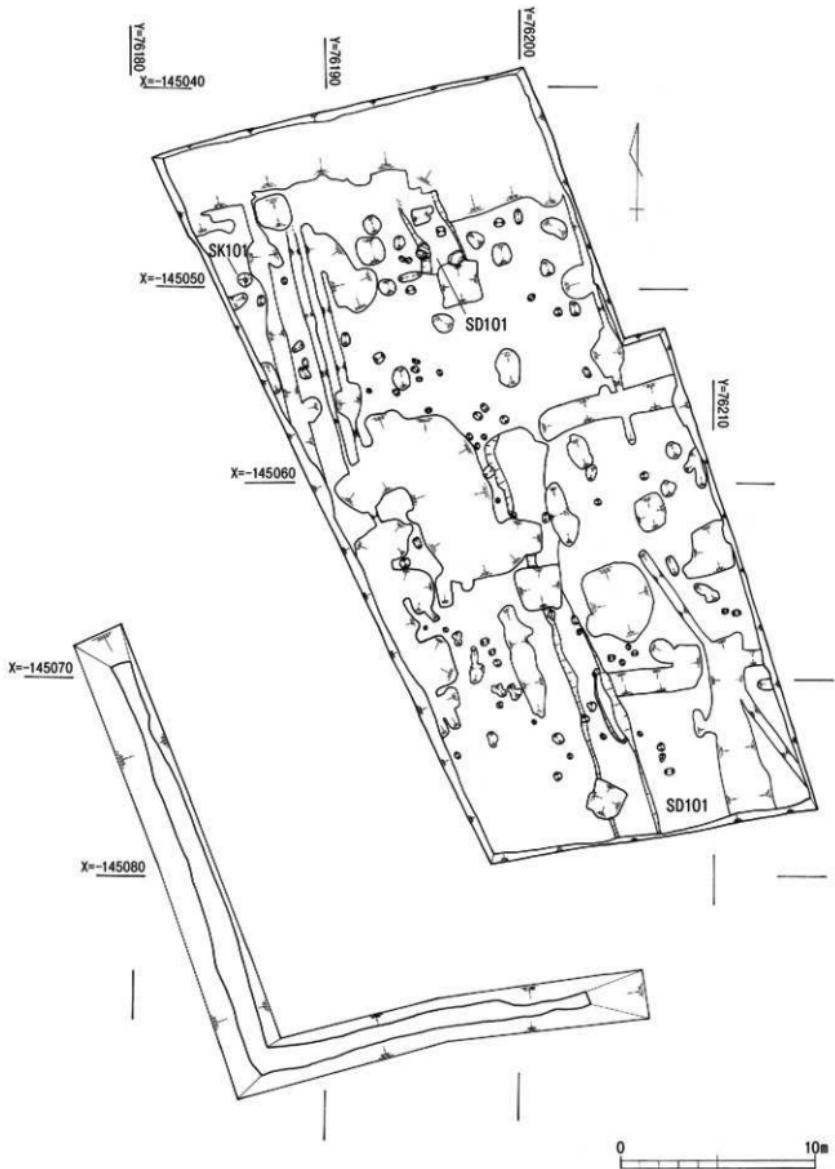


第8図 SK101平・断面図

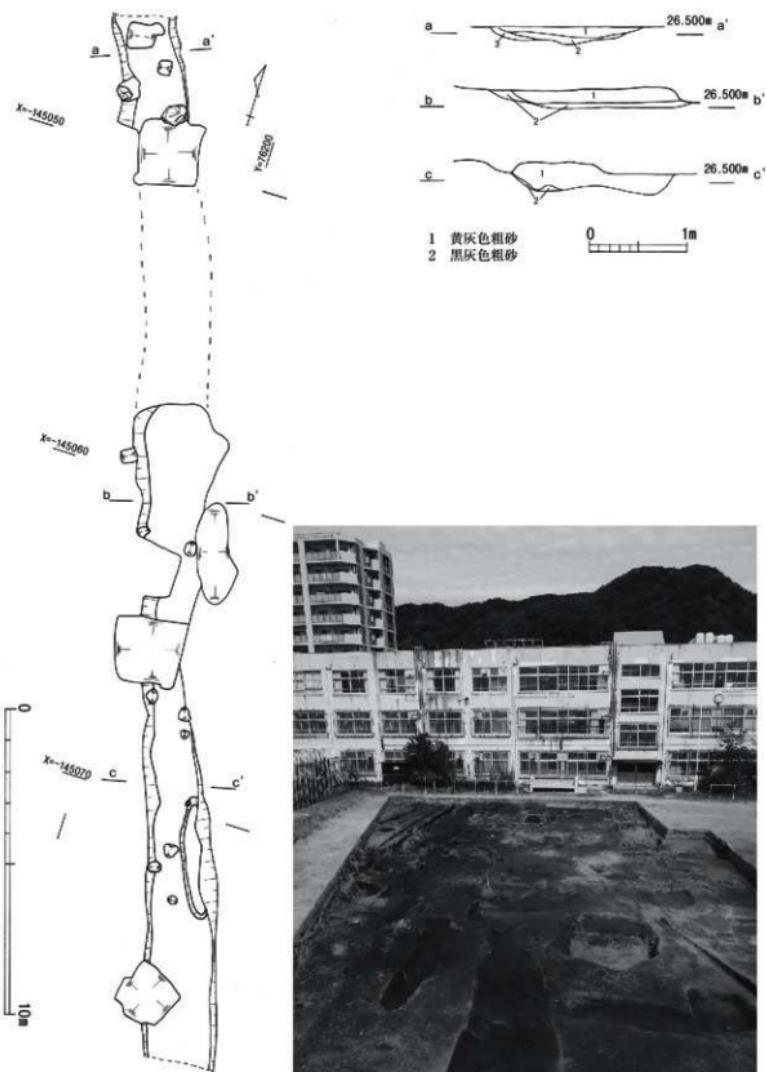
溝 SD101 (第10図)

幅約2.5m、検出面からの深さ約20cmで南北に延びる溝である。中央部は、削平により失われている。弥生時代から12世紀末の遺物片が出土しており、最終埋没時期は12世紀末であると考えられる。

平安時代末期の福原周辺において、荒田の台地上の土地区画は真北から西に17度傾くものになっており、建物や溝の遺構はそれぞれこの基準ライン±6度程度に収まる。祇園遺跡第18次調査で検出した並行する溝SD209・210はN13°Wで、今回の溝SD101はN19°Wであることから、荒田台地上の土地区画にあわせ、当調査地周辺でも土地造成がされたと考えられる。



第9図 第1遺構面平面図 (S=1:250)



第10図 SD101平・断面図

第11図 【写真】SD101（南から）

(2) 第2遺構面（第12図）

第2遺構面では、竪穴建物と考えられる遺構2棟、東西に延びる溝1条、柱穴10基、土坑3基、用途不明遺構5基を検出した。5次-2で調査した9区からは、SD201の一部を検出したが、10~12区、5次-3で調査した13~14区については遺構を検出できなかった。

竪穴建物 SB201（第13図）

4区東端で1辺3.6m以上、検出面からの深さ約10cmの竪穴建物と考えられる遺構の南西部を検出した。全体の規模は、東側が調査区外へ続くことと、北側部分が用途不明遺構（SX205）により切られていることから不明である。遺構の時期は、庄内期から布留期の甕が5点出土しており、そのことから古墳時代前期初頭頃の遺構であると考えられる。

竪穴建物 SB202（第15図）

1区北西で東西約4m、南北約5m、検出面からの深さ約50cmの方形の竪穴建物と考えられる遺構を検出した。北辺中央部で被熱痕を検出したが、カマド等の痕跡は確認できなかつた。

また、北端部より5世紀中頃（TK208型式）の甕が正置した状態で出土したが、出土した他の遺物は、古墳時代前期の遺物であったことと、上層付近より甕が出土したことから最終埋没時に混入した可能性が考えられる。このことから、遺構の時期は古墳時代中期であると考えられる。周壁溝、柱穴については確認することが出来なかつた。

溝 SD201（第16図）

調査区南半部で、幅約3.8m、検出面からの深さ55cmの東西に延びる溝を検出した。6区から6世紀後半（TK43型式）の須恵器の坏身2点、坏蓋1点が出土した。5区からは、7世紀前半から中頃（TK217型式）の須恵器の坏身が出土した。溝の最下層からは弥生時代後期の遺物のみが出土していることから、弥生時代後期には存在し、飛鳥時代に最終的に埋没した溝であると考えられる。

また、当遺構が、5次-2調査では9区で検出されており、西側に延びることを確認した。

土坑 SK201

2区北東部で、直径40cm、検出面からの深さ20cmの土坑を検出した。埋土からは、遺物が出土せず、詳細な時期は不明である。

土坑 SK202

4区北西部で、直径100cm、検出面からの深さ26cmの土坑を検出した。埋土からは、遺物が出土せず、詳細な時期は不明である。

土坑 SK203（第17図）

6区南西部で、直径62cm、検出面からの深さ9cmの土坑を検出した。埋土からは、古墳時代前期の土師器の高坏が出土した。このことから、古墳時代前期の遺構であると考えられる。

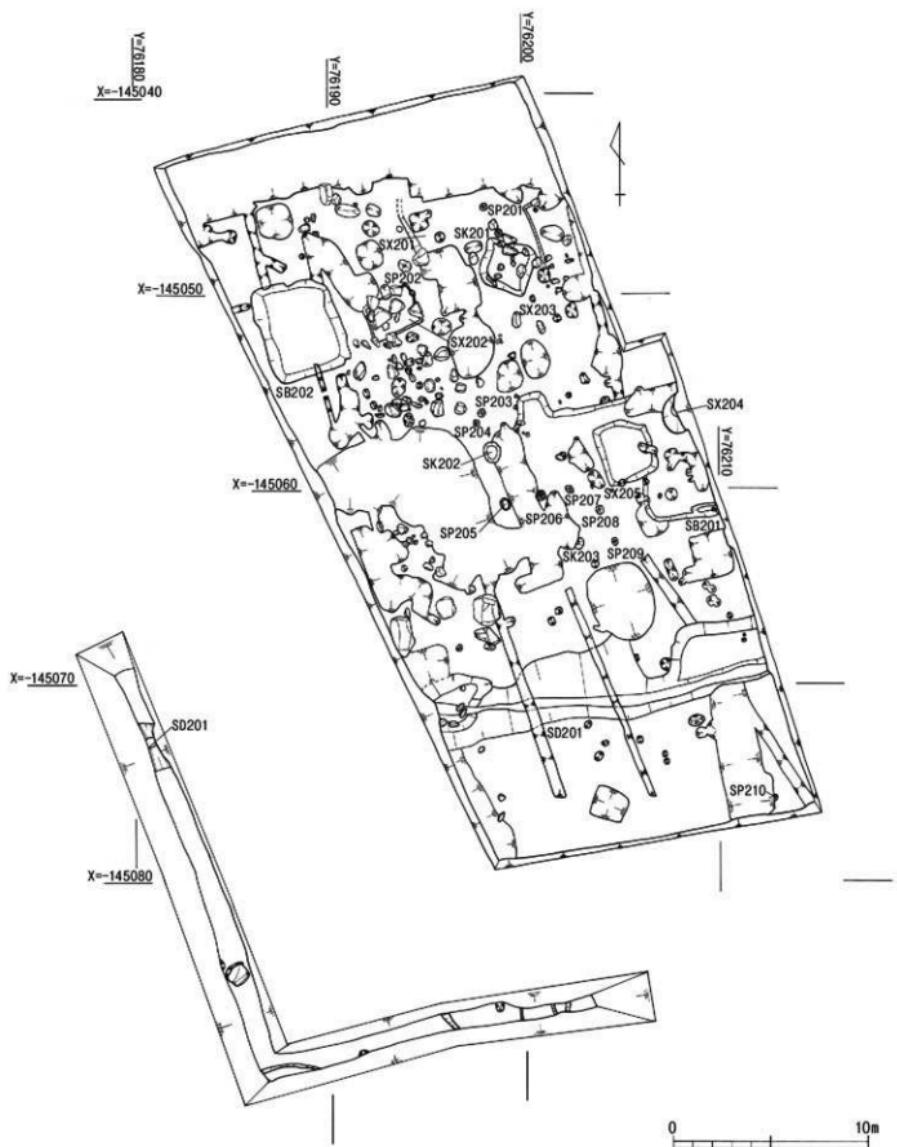
ピット

直径30~60cm、検出面からの深さ10~35cmのピットを10基検出した。いずれも、出土遺物に乏しく、詳細な時期は不明である。

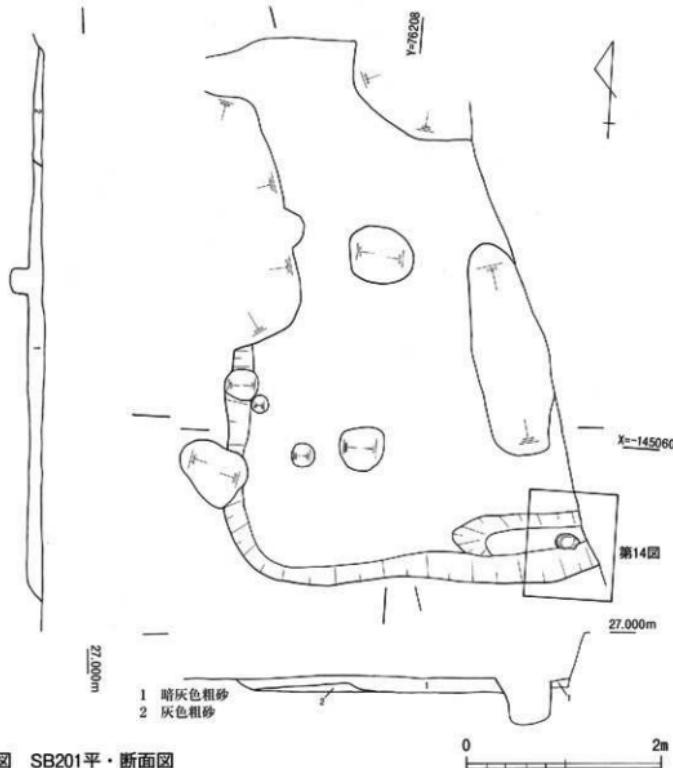
また、規則性を持って並び、建物を構成するものはなかった。

用途不明遺構 SX201（第18図）

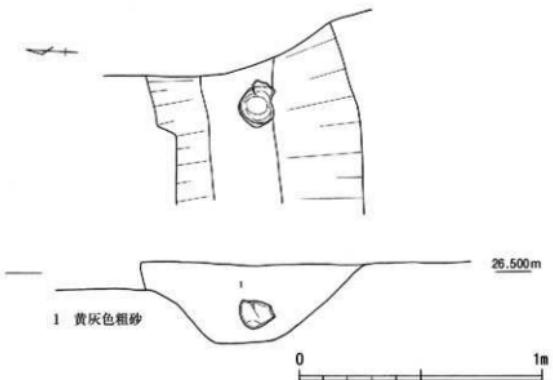
2区北西部で、東西2.1m、南北2.1m、検出面からの深さ16cmの方形を呈する用途不明遺構を検出した。埋土から遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。



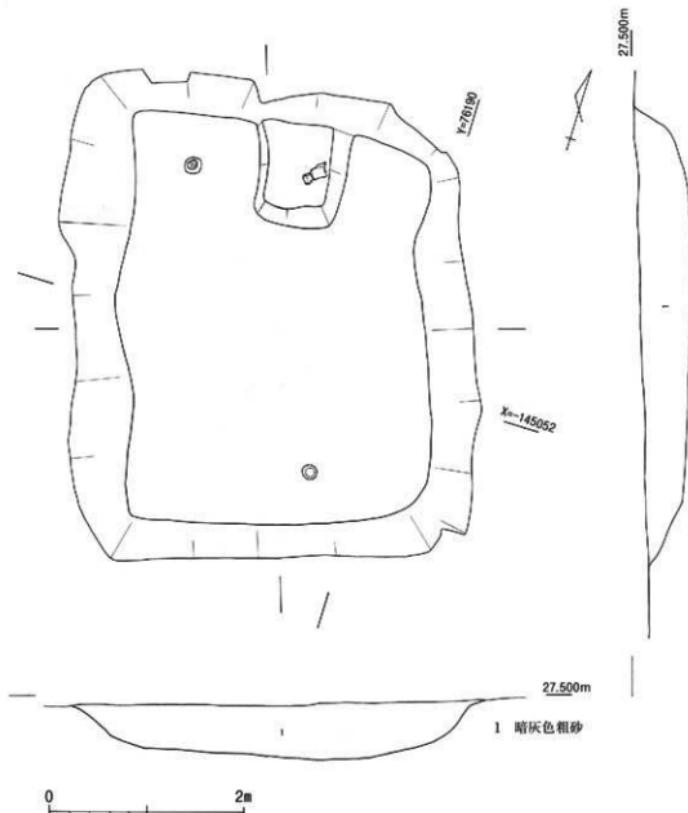
第12図 第2遺構面平面図 (S=1:250)



第13図 SB201平・断面図



第14図 SB201内南側落ち込み平・断面図



第15図 SB202平・断面図

用途不明遺構 SX202（第19図）

1区南東部で、東西2.8m、南北2.4m、検出面からの深さ14cmの方形を呈する用途不明遺構を検出した。埋土からは、遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

用途不明遺構 SX203（第20図）

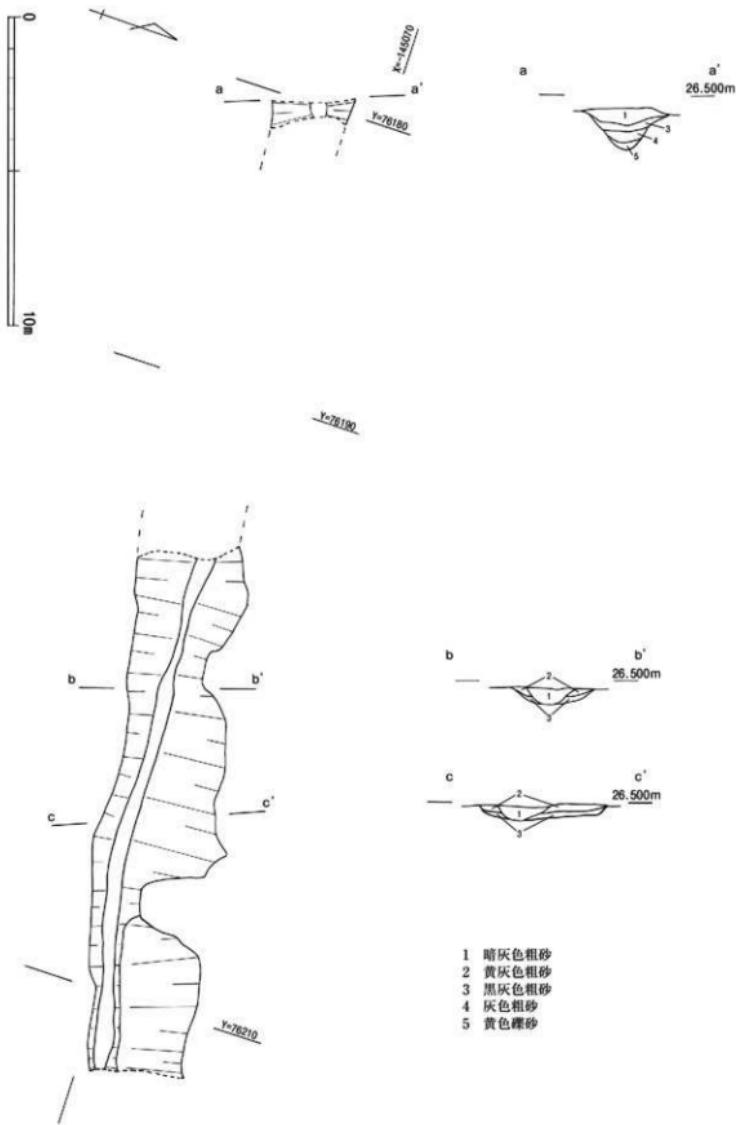
1区北部で、東西2.5m、南北2.4m、検出面からの深さ30cmの方形を呈する用途不明遺構を検出した。埋土からは、遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

用途不明遺構 SX204（第21図）

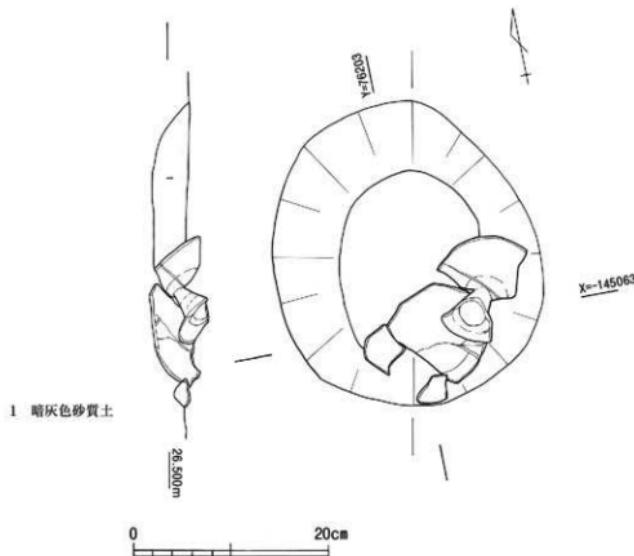
4区北東部で、最大径2.1m、検出面からの深さ66cmの円形を呈すると考えられる用途不明遺構を検出した。東半分は、調査区外へ続くため全体の形態と規模は不明である。埋土からは、遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

用途不明遺構 SX205（第22図）

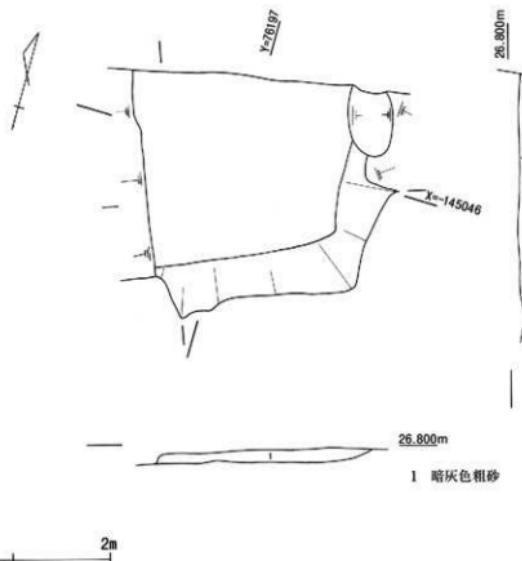
4区北部で、東西2.8m、南北3.2m、検出面からの深さ14cmの方形を呈する用途不明遺構を検出した。埋土からは、布留期の鉢が出土していることから、古墳時代前期の遺構であると考えられる。



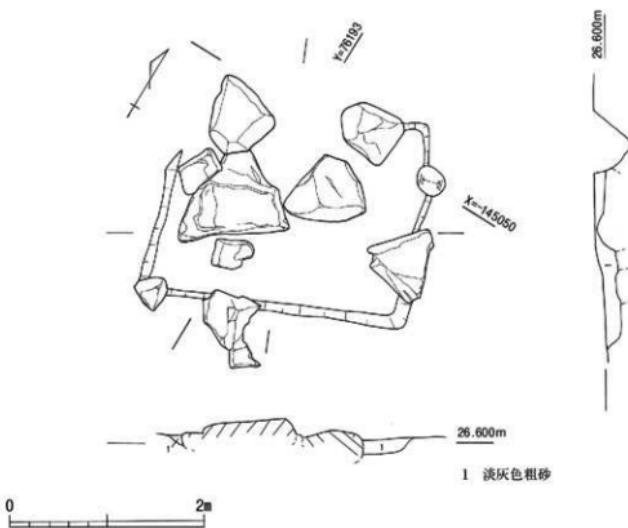
第16図 SD201平・断面図



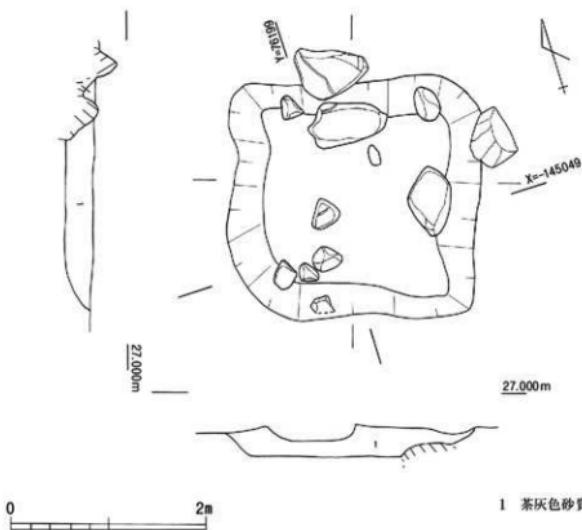
第17図 SK203平・断面図



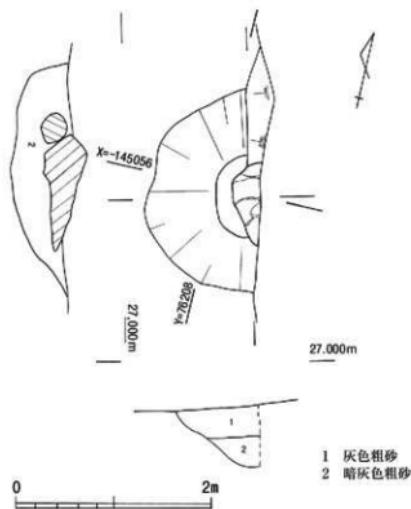
第18図 SX201平・断面図



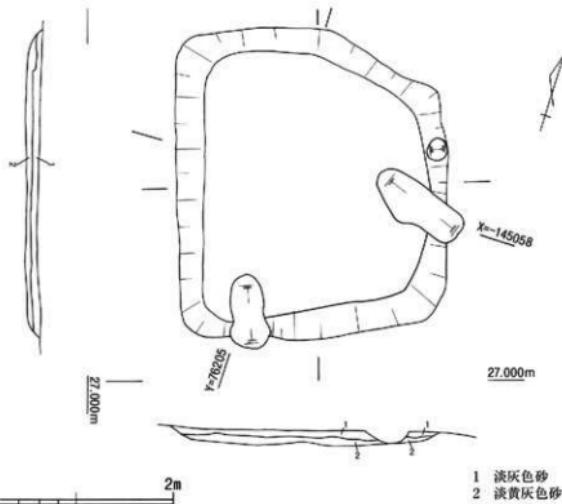
第19図 SX202平・断面図



第20図 SX203平・断面図



第21図 SX204平・断面図



第22図 SX205平・断面図

第4節 出土遺物

今回の調査では、28リットルコンテナに換算すると58箱分の遺物が出土した。出土遺物は、弥生時代後期～平安時代末期頃のもので多様な器種の遺物が確認出来た。また、周辺の遺跡からは瓦の出土が多数報告されているが、今回の調査でも28リットルコンテナ3箱分の瓦が出土した。

(1) 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第23図）

1～42は全て土師器皿で、口径によって2種類に分けられる。1は、体部を内傾させた、いわゆる「コースター皿」とも呼称されるものである。1は口径7.8cm、器高1.4cm、底径9.2cmを測る、体部内面には時計回りのヨコナデと底部内面にこれに直行する一方向のナデを施している。

2・3は、底部が持ち上がりず、やや丸底になっており、体部は短く立ち上がる。2は口径9.0cm、器高1.5cmを測る、体部内面には時計回りのヨコナデと底部内面にこれに直行する一方向のナデを施している。3は口径9.0cmを測り、体部内面には時計回りのヨコナデが施されている。

4～13は、底部が持ち上がり、手づくねで製作された物である。4・5は口縁端部を丸く収めている。6～13は、口縁部外端面に面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。口径は、最小が6の8.6cm、最大で13の9.8cmである。器高は、最小が9の1.4cm、最大で6・8の1.8cmである。体部外面は1段のヨコナデである。

14～42は小皿である。14～16は、底部が持ち上がりず、やや丸底になっており、体部は短く立ち上がる。14は、口径14.6cm、器高2.8cm、15は、口径14.2cm、器高3.5cm、16は、口径14.6cm、器高3.1cmを測る。体部内面には時計回りのヨコナデが施されている。

17・18は、底部が持ち上がりず、やや平坦になっており、口縁外端部に面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。17は口径14.5cm、器高3.4cm、底径6.4cm、18は口径13.8cm、器高3.6cm、底径8.0cmを測る。体部内面には時計回りのヨコナデが施されている。

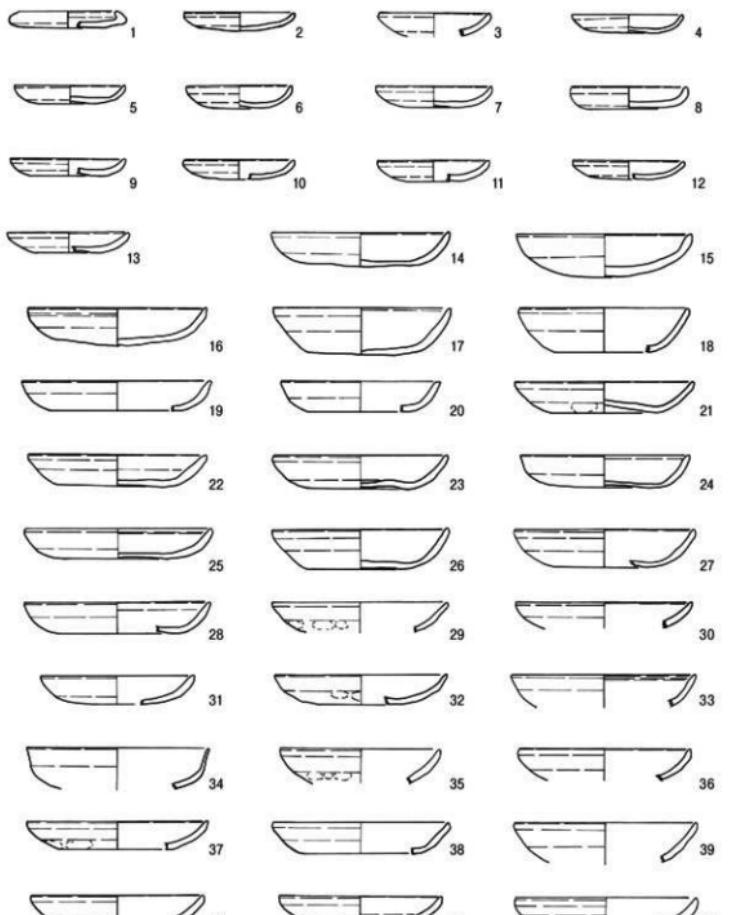
19・20は、口縁端部上面部にやや平坦な面を持つ。19は口径15.0cm、器高2.4cmを測り、底部が持ち上がらない。20は口径13.0cm、器高2.5cmを測り、底部が持ち上がる。

21～28は、底部が持ち上がり、口縁部外端部に面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。口径は、最小が24の13.8cm、最大で25の15.2cmである。器高は、最小が25・28の2.5cm、最大で26の3.3cmである。体部外面は1段のヨコナデで、体部内面には時計回りのヨコナデが施されている。

29～34は、底部の形態が不明で、口縁端部を丸く収めている。口径は、最小が31の12.4cm、最大で33の15.0cmである。体部内面には時計回りのヨコナデが施されている。

35～42は、底部の形態が不明で、口縁外端部に面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。口径は、最小が35の13.0cm、最大で39の15.6cmである。体部外面は1段のヨコナデで、体部内面には時計回りのヨコナデが施されている。

1～42は製作方法から、いわゆる「京都系土師器皿」と考えられる。京都系土師器皿の型式では、京VI期新～京VII期古段階にあたり、平安時代末期～鎌倉時代初頭の土師器皿であると考えられる。



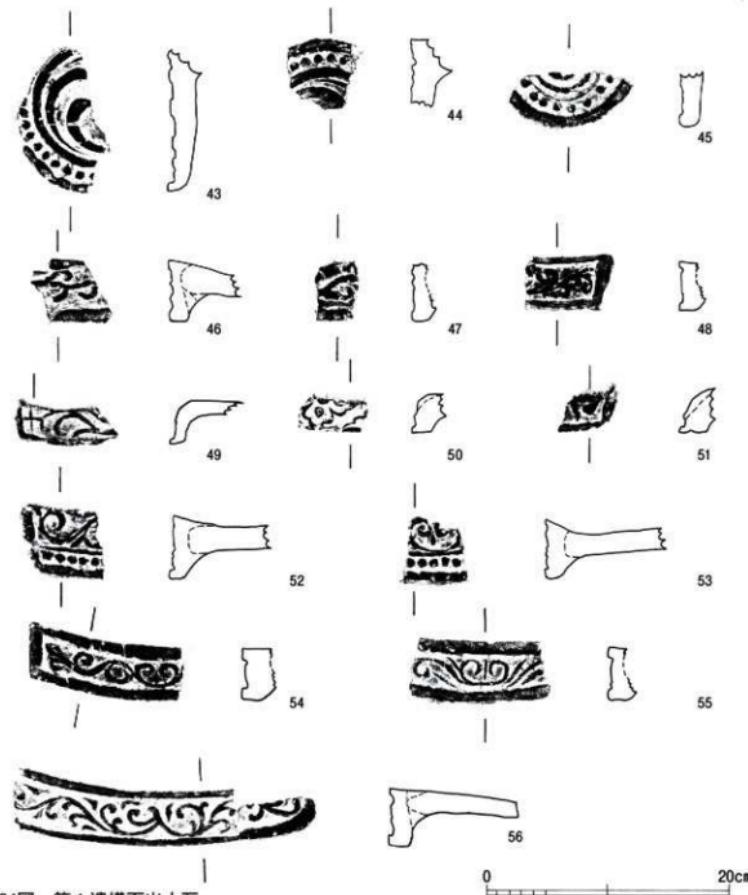
0 20cm

第23図 遺構に伴わない遺物

(2) 第1遺構面出土瓦

第1遺構面出土瓦 (第24図)

43~45は、右巻の巴文軒丸瓦である。46~48は軒平瓦で、唐草文があしらわれており、須恵質の焼き上がりで播磨産の瓦であると考えられる。49~51は軒平瓦で、粘土板を緩く折り曲げた後に、平瓦広端部凹面に粘土を足して瓦当部を形成した、「半折曲技法」で製作されたものである。胎土にチャートや石英を多く含み、やや軟質の焼き上がりであることから山城産の瓦であると考えられる。49は均整唐草文軒平瓦で、平成23年度に実施した紙園遺跡第15次調査においてSK106より出土した軒平瓦と同范のものであると考えられる。50は、半裁華文を中央に据えたものである。51は均整唐草文軒平瓦で、この瓦は紙園遺跡第15次調査において2区第1遺構面から出土した瓦と同范の瓦であると考えられる。



第24図 第1遺構面出土瓦

52・53は、C字上向型中心飾の唐草文軒平瓦で、中心飾内に水滴形を配し、左右に反転する唐草の先端が3葉に分枝する特徴を持つ。京都府の法性寺からも同系統の瓦が出土している。また、雪御所遺跡出土と伝えられており、昭和54年に湊山小学校の校長室に保管されていた軒平瓦が神戸市立博物館に寄贈されたが、この瓦とも同範のものである。

54・55はC字上向型中心飾軒平瓦である。56は、唐草文が左から右へ偏行し、主葉が連続して大きく反転しており、支葉は強く巻き込む。規格の都合か、文様の左側は切り取られている。全長は10.7cm、幅24.6cmで凹、凸両面共にヘラ削りがされている。52～56は、硬質な須恵質の焼き上がりで播磨産の瓦であると考えられる。

これらの瓦は、文様等の特徴から12世紀末～13世紀初頭頃の時期のものであると考えられる。

SK101出土遺物（第25図）

57～101は全て土師器皿で、口径により2種類に分けられる。57～61は、底部が持ち上がりず、やや丸底になっており、体部は短く立ち上がる。口径は最小が60の7.0cm、最大で59の9.4cmである。器高は、最小が57・58の1.6cm、最大で59の1.7cmである。体部内外面には時計回りのヨコナデが施されている。

62～82は、底部が持ち上がり、手づくねで製作されたものであると考えられ、口縁端部を丸く収めている。口径は、最小が64・74の8.4cm、最大で78の9.8cmである。器高は、最小が62の0.8cm、最大で67・68・69の1.7cmである。体部は短く立ち上がっており、内外面には時計回りのヨコナデが施されている。

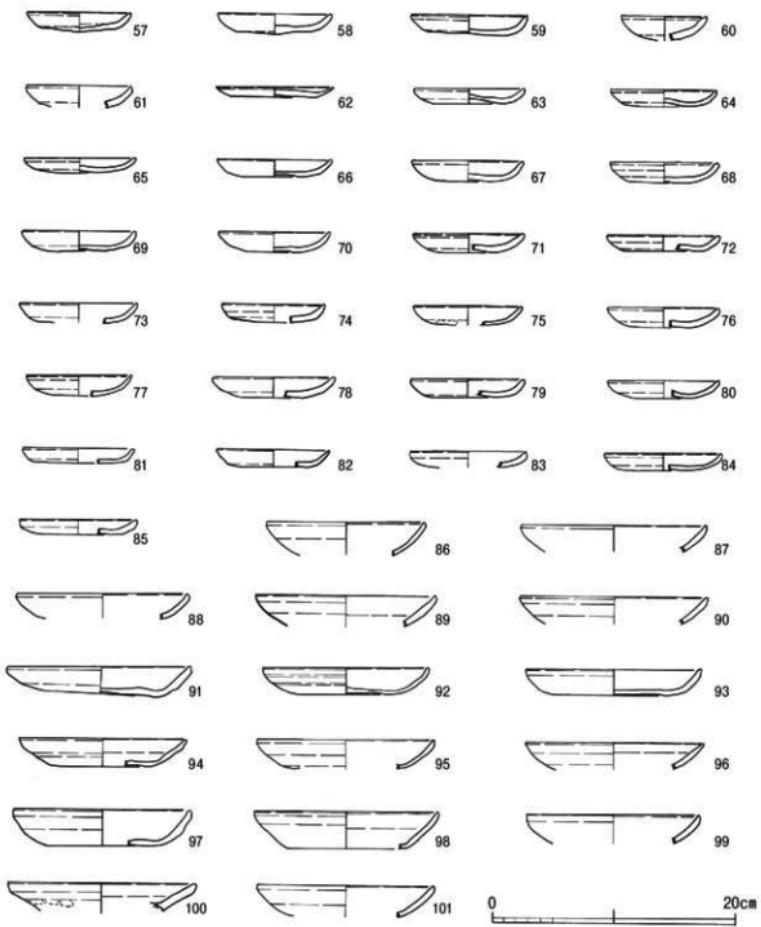
83～85は、底部が持ち上がり、口縁外端部に面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。83は口径9.4cm、器高1.4cm、84は口径9.6cm、器高1.4cm、85は口径9.6cm、器高1.2cmを測る。体部は短く立ち上がり、体部内面には時計回りのヨコナデが施されている。

86～90は小皿で、底が持ち上がりず、口縁外端部に面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。口径は、最小が88の14.0cm、最大で90の15.4cmである。体部内外面には時計回りのヨコナデが施されている。

91～98は小皿で、底部が持ち上がり、口縁端部を丸く収めている。口径は、最小が92の13.6cm、最大で91の14.8cmである。器高は、最小が93の2.1cm、最大で94の3.3cmである。体部内外面には時計回りのヨコナデが施されている。

99～101は小皿で、底部の形態が不明である。口縁外端部に面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。99は口径14.0cm、100は口径15.2cm、101は口径14.4cmを測る。体部内外面には時計回りのヨコナデが施されている。

57～101は製作方法から、いわゆる「京都系土師器皿」考えられる。京都系土師器皿の型式では、京VI期新～京VII期古段階にあたり、平安時代末～鎌倉時代初頭の土師器皿であると考えられる。このことから、SK101は、当該期の造構であると考えられる。



第25図 SK101出土土器

SD101出土遺物（第26図）

102は土師器高坏の坏部で、口径は16.5cmを測る。坏部が緩やかに外反して立ち上がるが、明瞭な稜をもたない。坏部内外面はナデが施されている。時期としては、古墳時代のものであると考えられる。

103は須恵器壺の口縁部である。口径は、14.8cmを測る。くびれ部にかけ、ハケで緊密に調整されており、内面はナデが施されている。時期としては、古墳時代後期のものであると考えられる。

104は須恵器坏蓋である。口径は14.8cmを測る。MT15型式のもので、6世紀前半のものであると考えられる。

(3) 第2遺構面出土遺物

SB201出土遺物（第27図）

105は、甕型のミニチュア土製品である。体部がやや内湾しながら立ち上がる。体部内外面共にナデが施され、底部内面には木葉痕が確認できる。時期としては、古墳時代前期のものであると考えられる。

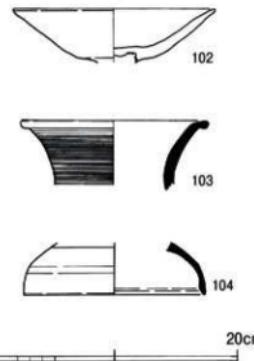
106は、弥生土器の複合口縁壺である。頸部が外彎して立ち上がり、口縁部が外彎ぎみに延びる。口縁部外面は波状紋が施され、円形浮紋で飾られている。頸部には突帶を貼り付け棒状工具にて刺突した刺突文がみられる。内面、頸部外面はナデを施す。時期としては、弥生時代後期終り頃であると考えられる。

107・108は、土師器の壺である。107は、口径11.8cm、器高5.2cmを測る。内湾ぎみに体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内外面共に、ナデを施し、内面は黒変している。時期としては、古墳時代前期頃であると考えられる。108は、口径10.6cm、器高5.5cmを測る。内湾ぎみに体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内外面共に、ナデを施す。時期としては、古墳時代前期初頭のものであると考えられる。

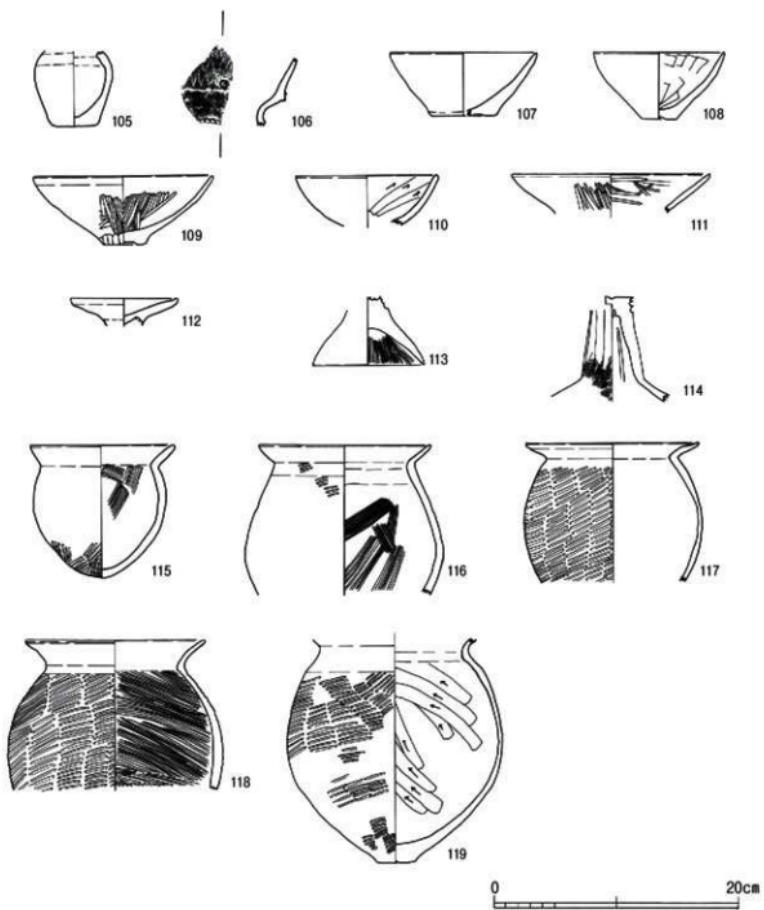
109は、弥生土器の鉢である。口径は14.8cm、器高5.6cmを測る。体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸く収める。口縁部は内外面共にナデを施し、底部内面から体部内面にかけミガキを施し、体部外面にもミガキを施す。底部外面には指頭圧痕がみられ、底部側面にはエビオサエを施す。時期としては、弥生時代後期のものであると考えられる。

110・111は、高坏の坏部である。110は、口径11.6cmを測る。坏部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く収める。口縁部は、内外面共にナデを施し、坏部外面についてもナデを施す。坏部内面には、半時計回りに連続して、下から上へ板ナデを施す。時期としては、弥生時代後期であると考えられる。111は、口径16.4cmを測る。坏部から口縁部にかけ、まっすぐ立ち上がり、口縁端部は丸く収める。口縁端部は内外面共にナデを施す。坏部は、内外面共にミガキを施す。時期としては、庄内期のもので古墳時代前期初頭頃であると考えられる。

112は、小型器台の口縁部である。口径8.8cmを測る。口縁端部断面は鈍い三角形を呈する。内外面共に、ナデを施す。時期としては、弥生時代後期～古墳時代前期初頭であると考えられる。



第26図 SD101出土土器



第27図 SB201出土土器

113は、台付壺の台部である。底径9.6cmを測る。上方へ内湾して立ち上がり、底部端部は丸く収める。内面はハケメを施し、外面はナデを施す。時期としては、詳細に断定することは困難であるが、弥生時代後期の遺物であると考えられる。

114は、高坏脚部である。脚柱部から外反ぎみに脚裾部が広がり、底部は欠損している。内面はナデが施され、外面は面取り後ハケメを施す。時期としては、古墳時代前期であると考えられる。

115～119は、壺である。115は、小型壺である。口径11.8cm、器高11.0cmを測る。底部は安定せず、丸底になっており、底部から内湾しながら立ち上がった体部から、外反して口頸部が延びる。口縁端部は、丸く収まる。口縁部内外面共にナデを施し、体部外面はタタキを施した後ナデを施す。体部内面は、下から上にハケメを施す。底部内面は、ナデを施し、底部から体部にかけ外面にはタタキを施す。時期としては、布留期のもので古墳時代前期の遺物であると考えられる。116は、壺で口径13.2cmを測る。内湾しながら立ち上がった体部から、外反して口頸部が延び、口縁端部を丸く収める。口縁部内外面共にナデを施し、体部外面にもナデを施す。体部内面には、ハケメを施す。時期としては、布留期のもので古墳時代前期の遺物であると考えられる。117は、小型壺で口径14.2cmを測る。内湾しながら立ち上がった体部から、外反して口頸部が延びる。口縁端部は、鈍く尖る。口縁部内外面共にナデを施し、体部外面にはタタキを施す。時期としては、庄内期のもので弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物であると考えられる。118は、壺で上半部のみ残存する。口径は、14.6cmを測る。内湾しながら立ち上がった体部から、外反して口頸部が延び、口縁端部は丸く収める。口縁部内外面共にナデを施し、体部外面にはタタキを施し、体部内面にはハケメを施す。時期としては、庄内期のもので弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物であると考えられる。119は、壺で、口縁部は欠損する。底部から体部が内湾して立ち上がり、体部からゆるやかに口頸部が外反する。頸部は内外面共にナデを施し、体部内面にはハケメを施す。体部外面には、タタキを施す。時期としては、庄内期のもので弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物であると考えられる。

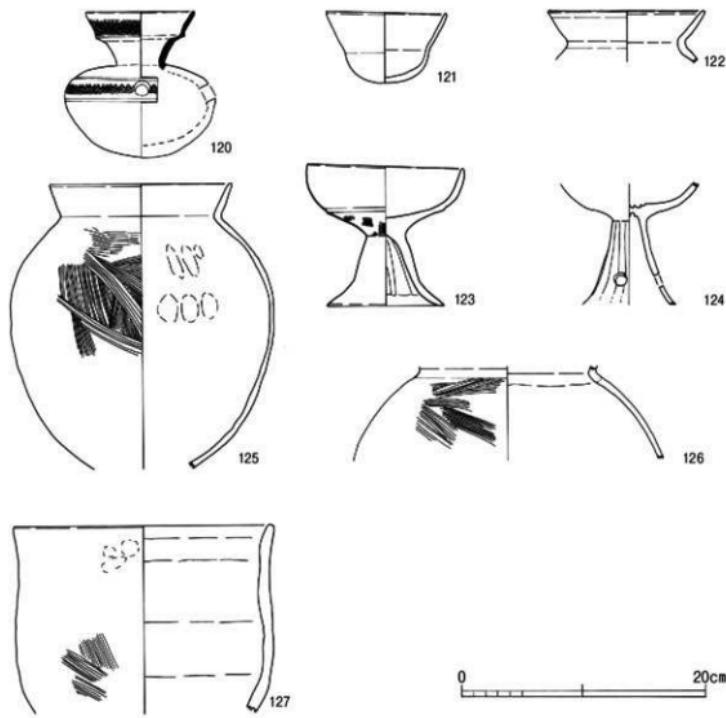
SB202出土遺物（第28・29図）

120は、須恵器の竈である。小型の竈で、肩部の張りが強く、頸部から口縁部にかけての部分に段を持つ。肩部外面と、口縁部外面に波状紋が巡る。遺存状態が良好で完形である。口径は、8.8cm、器高12.0cmを測る。時期としては、TK208型式に属するもので5世紀中頃の遺物であると考えられる。

121は、土師器の小型丸底壺である。口径は、9.8cm、器高5.8cmを測る。口縁部がやや直立ぎみに広がる。内外面共にナデを施す。時期としては、布留期のもので古墳時代前期の遺物であると考えられる。

122は、土師器の小型壺で、頸部から口縁部にかけてのみ残存する。口径は、12.6cmを測る。頸部から口縁部へ外反して立ち上がる。内外面共にナデを施す。時期としては、断定することが困難であるが、古墳時代の遺物であると考えられる。

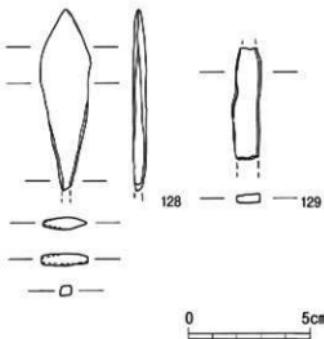
123は、土師器の高坏である。口径は、12.8cm、器高11.7cmを測る。脚部は、脚裾部にあたる部分で大きく外反し、坏部は頸部から口縁部に至る部分に小さな段を持つ。頸部外面はハケを施した後ナデを施し、その他の部位は内外面共にナデを施す。時期としては、布留期のもので、古墳時代前期の遺物であると考えられる。



第28図 SB202出土土器

124は、土師器の高環で、底部と環部の上半部を欠損する。脚部から脚裾部にかけて、緩やかに末広がりで広がる。脚部に、3ヶ所の穿孔がある。脚部外面には面取りがみられ、脚部内面、環部外面にはナデを施す。時期としては、古墳時代前期の遺物であると考えられる。

125・126は壺である。125は、口径14.9cmを測る。体部から頸部にかけやや内弯し、頸部から外折し口縁部が延びる。口縁端部は、面になっていることが確認できる。口縁部内外面共にナデを施し、体部外面は、ハケメを施す。体部内面にはナデを施し、指頭圧痕が所々確認できる。時期としては、庄内期のもので弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物であると考えられる。126は、体部か



第29図 SB202出土鉄製品

ら頸部にかけ内弯し、頸部で外折する。体部内面はナデを施し、外面にはハケメを施す。時期としては、詳細に断定することは困難であるが古墳時代前期の遺物であると考えられる。

127は、土師器の大型粗製鉢である。復元口径は、21.2cmである。底部から体部にかけ緩やかに立ち上がり、体部から口縁部にかけまっすぐ延びる。体部内面には、胎土を積み上げ成形した痕跡が確認できる。内外面共に、ナデを施す。時期としては、布留式古段階のもので古墳時代前期初頭の遺物であると考えられる。

128は、鉄鎌である。長さ7.39cm、幅2.05cm、厚さ0.57cmを測り、重量12.8gである。茎は断面方形の角柱状であるが一部を欠失する、有茎柳葉式に分類される。時期としては、弥生時代後期末～古墳時代前期であると考えられる。

129は、鉄製の槍鉤であると考えられる。長さ4.57cm、幅1.08cm、厚さ0.36cm、重量は4.35gを測る。先端部と体部は欠損している。時期としては、弥生時代後期末～古墳時代前期であると考えられる。

SD201最終埋土出土遺物（第30図）

130は、須恵器の坏蓋である。口径15.2cm、器高4.7cmを測る。TK43型式に属し、古墳時代後期の遺物であると考えられる。131は、須恵器の坏身である。口径13.0cm、器高4.0cmを測る。TK43型式に属するもので、古墳時代後期の遺物であると考えられる。

132は、土師器の長胴甕で、体部以外欠損している。体部はまっすぐ立ち上がり、粘土紐を積み上げて成形した痕跡が体部内面で確認できる。内面はナデを施し、外面には下から上へハケメを施す。時期としては、古墳時代中期～後期の遺物であると考えられる。

133は、土師器の壺である。復元口径は、22.6cmを測る。体部がやや内弯し、頸部で外折して口縁部が延びる。口縁部内外面共にナデを施し、体部内面にもナデ、くびれ部にはハケメを施す。体部外面にはハケメを施す。時期としては、古墳時代後期の遺物であると考えられる。

SD201出土遺物（第31図）

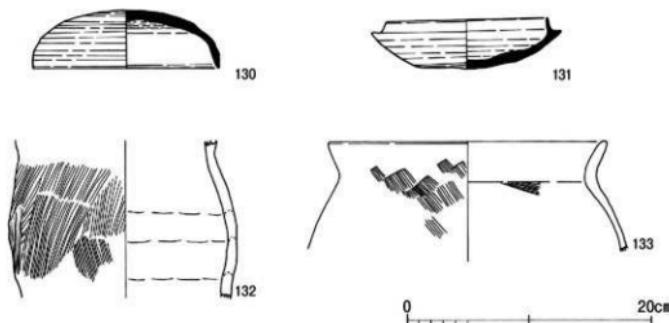
134は、須恵器の坏蓋である。口径は11.6cm、器高3.3cmを測る。TK43型式に属するもので、古墳時代後期の遺物であると考えられる。

135～137は、須恵器の坏身である。135は、口径11.4cm、器高3.2cmを測る。受部が上にひしゃげており、俯瞰すると楕円形ぎみの形態である。粗悪品である可能性がある。TK43型式に属するもので、古墳時代後期の遺物であると考えられる。136は、口径10.0cm、器高3.5cmを測る。TK217型式に属するもので、飛鳥時代の遺物であると考えられる。137は、口径11.1cm、器高4.4cmを測る。TK217型式に属するもので、飛鳥時代の遺物であると考えられる。

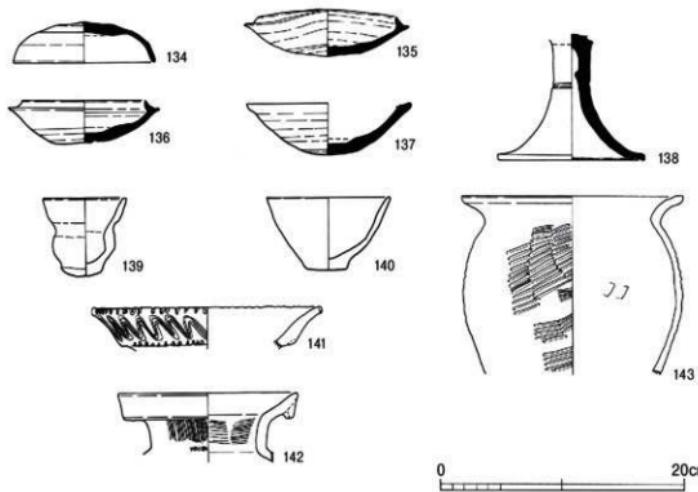
138は、須恵器の高坏脚部である。復元底径は、12.0cmを測る。脚裾部にかけてやや外反して広がり、内外部共にナデを施す。時期としては、飛鳥時代の遺物であると考えられる。

139は、ミニチュアの壺である。口径は、6.9cm、器高6.45cmを測る。底部から頸部にかけ内弯して立ち上がり、頸部から外折し口縁部が延びる。口縁端部は、丸く収める。内外面共に、ナデを施し、手づくねで製作されたと考えられる。時期としては、詳細に断定することは困難であるが、古墳時代の遺物であると考えられる。

140は、土師器の小型鉢である。口径は10.0cm、器高6.0cmを測る。底部から口縁部にかけて内弯して立ち上がる。口縁端部は、丸く収める。内外面共に、ナデを施す。時期としては、布留



第30図 SD201最終埋土出土土器



第31図 SD201出土土器

期のもので古墳時代前期の遺物であると考えられる。

141は、弥生土器の二重口縁壺で口縁部にあたる。復元口径は、18.6cmを測る。明瞭に口縁部が屈曲し、口縁が頸部から屈曲する部分と口縁端部に縦方向の刻目を施し、口縁部には波状紋を施す。時期としては、庄内期のもので弥生時代後期末の遺物であると考えられる。

142は、広口短頸壺で、加飾されないシンプルな壺である。復元口径は、14.6cmを測る。短い頸部から外反し、口頸部を屈曲させる。口縁部内外面と頸部内面はナデを施し、頸部外面はハケメを施す。時期としては、弥生時代中期頃の遺物であると考えられる。

143は、甕である。復元口径は、18.0cmを測る。体部は内弯して立ち上がり、頸部で外折し口縁部は外弯ぎみに短く延びる。口縁端部は丸く收める。口縁内外面、体部内面はナデを施し、体部外面にはタタキを施す。時期としては、庄内期のもので弥生時代後期末頃の遺物であると考えられる。

SX203出土遺物（第32・33図）

144は、2個体が固着した鉄鎌である。損傷する可能性があるため、分離は不可能である。長さは最大3.46cm、幅1.19cm、重量7.08gを測る。

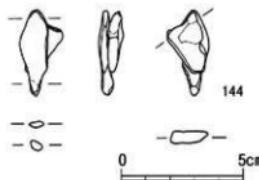
145は、土師器の甕である。復元口径は、13.6cmを測る。体部は内弯して立ち上がり、頸部で外折し口縁部が短く延びる。口縁端部は丸く收める。口縁部内外面共にナデを施し、体部内面にはハケを施した後ナデを施す。体部外面には、タタキを施した後、ハケを施す。

146は、土師器の高坏である。復元口径は、20.8cm、器高23.1cmを測る。脚柱部は外弯ぎみに広がり、脚裾部で急に外折する。坏部は内弯して立ち上がり、口縁部で緩やかに外弯ぎみに延びる。口縁部内外面、坏部内面はナデを施し、坏部外面はハケを施した後ナデを施す。脚柱部内面、脚裾部内外面共にナデを施し、脚柱部外面には面取り状に強いナデを施し、その後ハケメを施す。時期としては、布留中期のもので古墳時代前期頃の遺物であると考えられる。

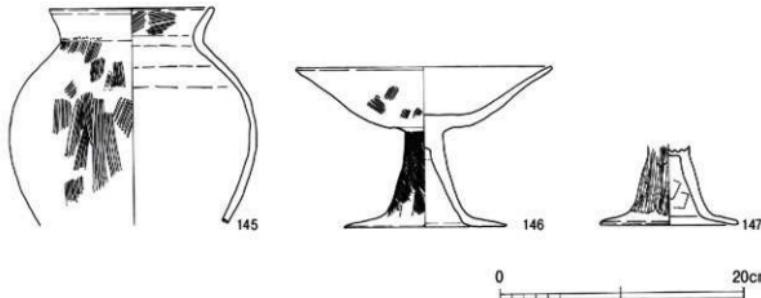
147は、土師器高坏の脚部である。底径は、11.4cmを測る。脚柱部はまっすぐ裾部に広がり、裾部で強く外折し延びる。脚裾部は外面共にナデを施し、脚柱部の内面は反時計回りにヘラ削りを施し、外面はヘラミガキを施す。時期としては、古墳時代前期頃の遺物であると考えられる。

SX205出土土器（第34図）

148は、小型鉢である。復元口径9.4cm、器高6.8cmを測る。底部から頸部にかけ内弯して立ち上がり、頸部で外反し口縁部が延びる。口縁部内面はハケメを施し、外面にはナデを施す。体



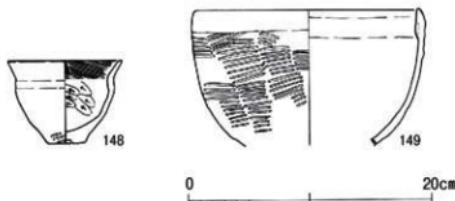
第32図 SK203出土鉄製品



第33図 SK205出土土器

部内面、体部外面はナデを施し、底部外面にはタタキを施す。時期としては、古墳時代前期頃の遺物であると考えられる。

149は、鉢である。復元口径17.2cmを測る。体部から口縁部にかけ内弯して立ち上がる。口縁部は、粘土紐を積み成形された痕跡がみられる。口縁部内外共にナデを施し、体部内面はナデを施し、体部外面にはタタキを施す。時期としては、布留期のもので古墳時代前期頃の遺物であると考えられる。



第34図 SX205出土土器

第2 遺構面出土遺物（第35・36・37図）

150は、須恵器壺である。口径は18.0cm、器高5.3cmを測り、やや内弯気味の体部で、口縁端部は丸く收める。東播系須恵器で、時期としては12世紀中頃～13世紀初頭のものであると考えられる。

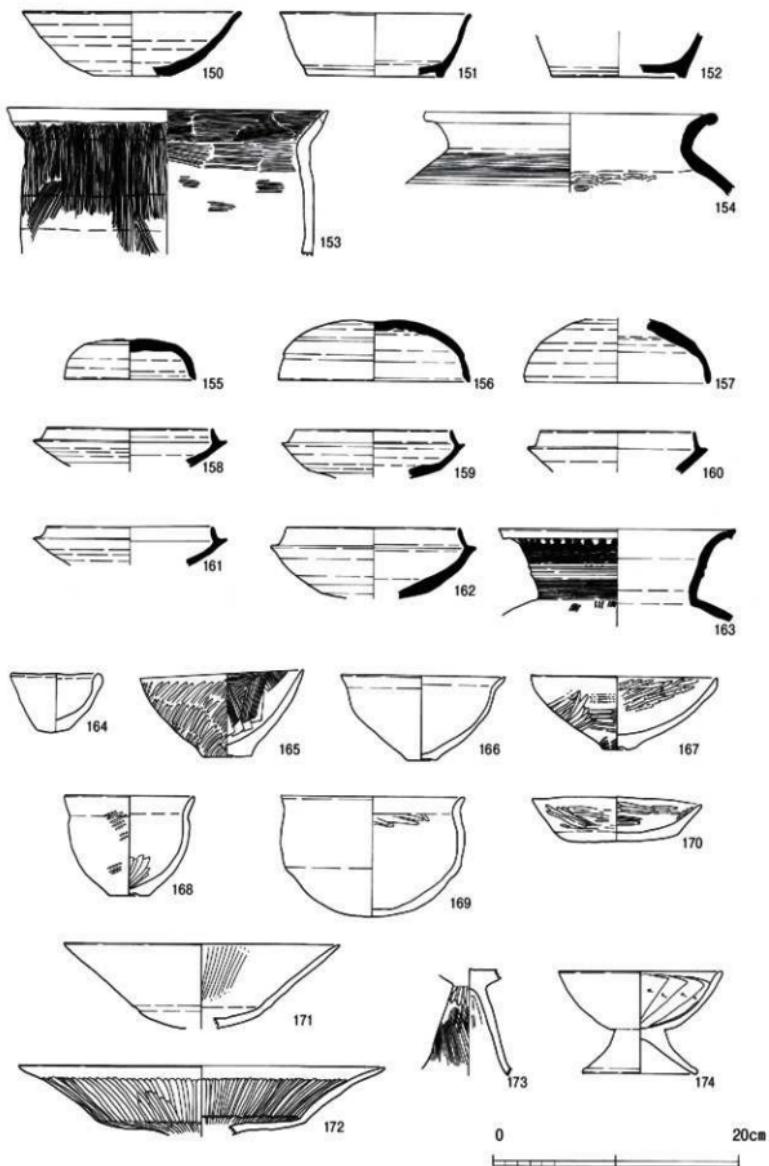
151・152は、須恵器壺身である。151は、復元口径15.6cm、復元底径11.4cm、器高5.2cmを測り、TK48型式に属するもので、飛鳥時代の遺物であると考えられる。152は、復元底径11.6cmを測り、TK48型式に属するもので、飛鳥時代の遺物であると考えられる。

153は、上半部が残存する壺である。口径は、26.2cmを測る。体部がまっすぐに立ち上がり、口縁部で外折し、短く延びる。口縁端部はナデが施され、口縁部内面は横向きにハケメを施す。口縁、体部外面は下から上へハケメを施し、体部内面にはナデが施されている。時期としては、7世紀～8世紀の遺物であると考えられる。

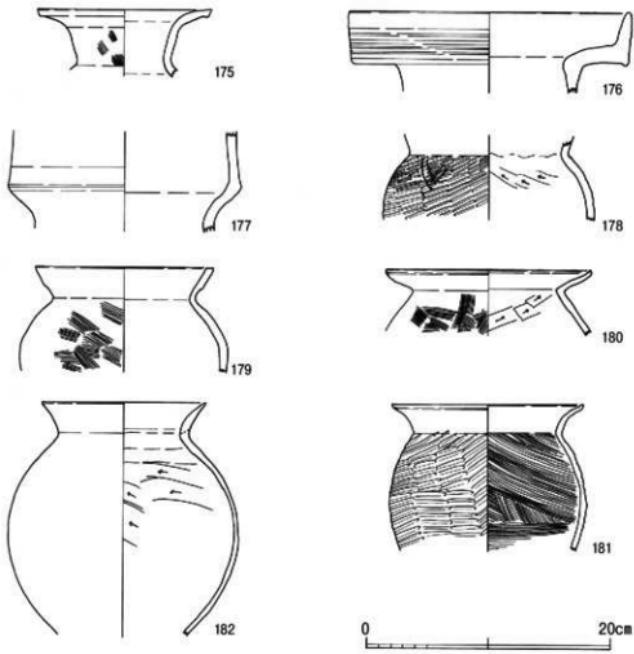
154は、須恵器壺の口縁部である。口径は23.6cmを測る。口縁端部は、丸く取めており、体部内側には當て具痕が確認できる。また、口縁部内面、体部外面には自然釉がかかっている。時期としては、TK46型式に属するもので飛鳥時代の遺物であると考えられる。

155～157は須恵器壺蓋である。155は、口径10.8cm、器高3.3cmを測り、TK43型式に属するもので古墳時代末期の遺物であると考えられる。156は、口径15.4cm、器高4.9cmを測り、TK10型式に属するもので古墳時代後期のものであると考えられる。157は、口径15.0cmを測り、MT85型式に属するもので、古墳時代後期の遺物であると考えられる。

158～162は須恵器壺身である。158は、口径13.6cmを測り、TK10～TK43型式に属するもので、古墳時代後期の遺物であると考えられる。159は、口径12.8cmを測り、TK217型式に属するもので、飛鳥時代の遺物であると考えられる。160は、口径12.8cmを測り、古墳時代後期頃のものであると考えられる。161は、口径13.6cmを測り、TK43～TK217型式に属するもので、古墳時代後期～飛鳥時代の遺物であると考えられる。162は、口径14.0cmを測り、TK43～TK217型式に属するもので、古墳時代後期～飛鳥時代の遺物であると考えられる。



第35図 第2遺構面出土土器(1)



第36図 第2遺構面出土土器(2)

163は、須恵器窓の口頭部である。直線的な口縁部が上外方に伸び、口縁端部近くの外面に2条のシャープな稜を巡らし、稜上方に波状文を巡らす。TK208型式に属するもので、古墳時代中期～後期の遺物であると考えられる。

164は、ミニチュア土製品の鉢である。口径は7.4cm、器高4.8cmを測る。体部から口縁部にかけ内外面ともに、ナデが施されており、口縁端部は丸く收めている。時期を特定することは難しいが、古墳時代以降のものであると考えられる。

165は、弥生土器の小型鉢である。口径は13.4cm、器高6.8cmを測る。底部外面から口縁部外面にかけタタキが施され、内面はハケが施されている。口縁端部は鈍くとがる。時期としては、弥生時代後期末の遺物であると考えられる。

166は、土師器の塊である。口径は13.4cm、器高7.0cmを測る。内外面共にナデが施されており、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く收められている。時期としては、特定が難しいが古墳時代の遺物であると考えられる。

167は、弥生土器の小型鉢である。口径は15.3cm、器高6.0cmを測る。底部外面にはタタキ、体部外面にはミガキ、内面と口縁部にはナデが施されている。内弯気味の体部で、口縁断面は鈍

い三角形を呈する。時期としては、庄内併行期のもので弥生時代後期末の遺物であると考えられる。

168は、外反口縁鉢で、小型の鉢である。口径は10.6cm、器高8.2cmを測る。体部が緩やかに立ち上がり、口縁部は外折して短く伸びる。体部にはナデが施されている。時期としては、弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の遺物であると考えられる。

169は、土師器の小型甕である。口径は13.2cm、器高9.8cmを測る。底部は丸底で、体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外折して短く伸びる。口縁端部は、丸く収められている。体部から口縁部にかけて、内外面共にナデが施されている。時期としては、古墳時代後期頃の遺物であると考えられる。

170は、土師器壠である。最大口径は14.0cm、最小口径9.8cm、器高3.2cmを測る。俯瞰でみると、楕円形を呈する。体部から口縁部にかけ、内外面共にヨコナデと底部内面に一方向ナデが施されている。底部外面には、反時計回りにヘラ削りが施されている。口縁部は短く立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。時期を特定することは困難であるが、古墳時代の遺物であると考えられる。

171-174は、土師器の高坏である。171、172は有稜高坏で、脚部から下は欠損している。171は、口径22.6cmを測る。坏部が緩やかに外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。坏部外面はナデが施され、内面はナデを施した後、ミガキを口縁に向け施す。時期としては、布留期のもので、古墳時代前期の遺物であると考えられる。172は、口径30.0cmを測る。坏部がやや外反して立ち上がり、口縁端部は鈍く尖る。坏部内外面共に下から上へミガキが施され、口縁部はナデが施されている。時期としては、古墳時代の遺物であると考えられる。

173は、高坏の脚部で、坏部と裾端部は欠損している。脚は裾に向かってほぼまっすぐに伸びる。脚部内面にはナデが施され、外面はハケが施された後ナデを施す。時期としては、古墳時代の遺物であると考えられる。

174は、復元口径は13.3cm、器高8.4cmを測る。坏部はやや内湾して立ち上がり、そのまま口縁部は丸く収めている。脚部はやや外反して広がり、裾端部は丸く収める。坏部内面には反時計回りに連続してハケメが施されており、坏部外面、脚部内外面ともにナデが施されている。時期としては、布留期のもので、古墳時代前期の遺物であると考えられる。

175は、土師器の壺である。復元口径は16.0cmを測る。頸部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部で大きく開く。口縁外端部に緩やかな面を持つ。頸部内面、口縁部内外面共にナデが施されており、頸部外面は、ハケを施した後、ナデが施されている。時期としては、古墳時代前期の遺物であると考えられる。

176・177は、土師器の二重口縁壺である。171は、口径23.0cmを測る。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部もほぼ垂直に伸びる。口縁部外面には、5条の凹線紋を巡らせる。口縁部内面、頸部内外面共にナデが施されている。時期としては、弥生時代終末期の遺物であると考えられる。また、形状から愛媛県もしくは丹後地域といった他地域からの搬入品であると考えられる。177は、頸部がやや外反して立ち上がり、口縁部はまっすぐに内向して延びる。時期としては、古墳時代前期のものと考えられ、形状から吉備地方からの搬入品である可能性がある。

178～182は、甕である。178は、口縁部と底部を除く体部のみ残存する。内湾して立ち上がった体部が頸部で外折する。体部外面はタタキが施され、体部から頸部にかかる部分に線刻が確認できる。体部内面には、工具によるナデが施され、くびれ部では粘土接合痕がみられる。時

期としては、庄内期～布留期のものと考えられる。

179は、上半部が残存する。口径は、14.6cmを測る。内湾して立ち上がった体部が頸部で外折し、口縁部に直接延びる。口縁端頂部は平坦な面を持つ。口縁部、体部内面にはナデが施されており、体部外面には、ハケを施した後ナデが施されている。時期としては、古墳時代後期の遺物であると考えられる。

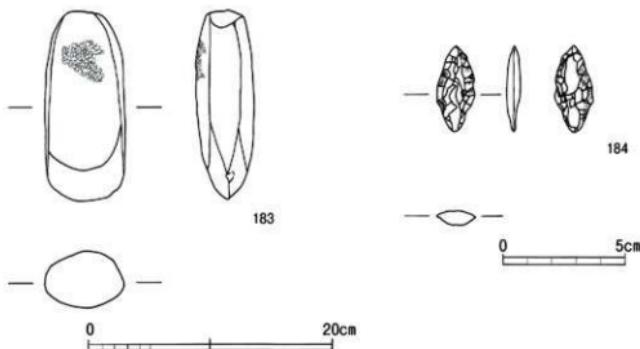
180は、口径16.8cmを測る。上部が残存する。内湾して立ち上がった体部が頸部で外折し、口縁部に直接延びる。口縁端部外面には面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。口縁部は、ナデが施され、体部外面にはハケメが、体部内面には、ヘラ削りが施されている。河内地域に見られる形状で、時期としては布留期のもので古墳時代の遺物であると考えられる。

181は、上半部が残存する。口径は、15.6cmを測る。内湾して立ち上がった体部が頸部で外折し、口縁部が外反ぎみに延びる。口縁端部外面には面を持ち、口縁断面は鈍い三角形を呈する。口縁部内外面にはナデが施され、体部内面にハケメを施し、体部外面にはタタキを施す。時期としては、布留期のもので古墳時代前期の遺物であると考えられる。

182は、底部以外が残存する。口径は、13.4cmを測る。内湾して立ち上がった体部が頸部で外折し、口縁部に直線的に短く延びる。口縁端部は丸く收める。口縁部内外面、体部外面にはナデが施され、体部内面にはハケメを施す。時期としては、古墳時代前期の遺物であると考えられる。

183は、磨製石斧で完品である。長さは15.5cm、幅6.6cm、厚さ4.7cmで、重量は77.6g、比重2.81を測る。材質は流紋岩であると考えられる。基部には打痕が確認出来、転用されたことが分かる。時期として、詳細に特定することは困難であるが、弥生時代～古墳時代の遺物であると考えられる。

184は、サスカイト製石鎌（有茎式）で長さ3.6cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重量2.63gを測る。調整剥離の方向を変えず、幅、深さ、回数などを調節し、茎部を成形している。時期としては、弥生時代の遺物であると考えられる。



第37図 第2遺構面出土石器

参考文献

出土遺物に関しては、下記の文献を参考にした。

森田克行『攝津地域』寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社1990

『弥生土器集成と編年-播磨編-』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号 大手前大学史学研究所2007

小林俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房2005

大阪府立近つ飛鳥博物館『年代のものさし-陶邑の須恵器-』平成17年度冬季企画展図録2006

平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群1』1966

寺島孝一・片岡肇編『法住寺般経』財團法人古代學協會1984

京都教育大学考古学研究会『鳥羽離宮跡出土軒丸の整理』『埋蔵文化財発掘調査報告書(1968)』京都府教育委員会1968

財團法人京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎氏収集瓦図録』財團法人京都市埋蔵文化財研究所1996

大村直「石獅・銅獅・鐵獅」「史館」第十七号 弘文社1984

田井中洋介「滋賀県における弥生時代の石獅の変遷についての素描」「紀要」第11号財團法人滋賀県文化財保護協会1998

松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性-とくに打製石器について-」「考古学研究」35-4 考古学研究会1989

第3章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

(1) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、主なものとして竪穴建物2棟、土坑、用途不明遺構を検出した。時期は概ね古墳時代前期～中期にまとまっている。また、弥生時代後期末の遺物も一定量出土している。調査区全体において、遺物包含層からも一定量の弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

雪御所遺跡における調査で、今回の調査地の北側では弥生時代後期末～古墳時代後期の集落跡が見つかっている。また、雪御所遺跡の東側に広がる祇園遺跡の調査においても、弥生時代中期～古墳時代前期初頭の集落跡が見つかっている。過去の調査成果を鑑みれば、集落の中心部は平野交差点北東付近に展開していたと考えられる。周知の埋蔵文化財包蔵地としては、「雪御所遺跡」と「祇園遺跡」は分けられてはいるが、弥生時代～古墳時代の集落としては同一の集落単位であったと考えられる。また、今回の調査地では弥生時代後期末～古墳時代中期の遺構に限られ、今回の調査地は集落の西辺部に当たっていると考えられる。ただ、雪御所遺跡は範囲から考えると、北側部分に調査が偏っているため集落としての範囲はより広がる可能性がある。

調査区南側では、弥生時代後期から存在し飛鳥時代に埋没したと考えられる東西に延びる溝を検出し、5次～2調査の9区からも検出したため、より西へ延びることが考えられる。ただ、1次調査では検出されておらず、詳細は不明であるが、溝より南側では遺構を検出しておらず、古墳時代における集落の区画溝等周辺集落に関連する遺構である可能性は否定できない。

(2) 平安時代の遺構

今回の調査は、雪御所という名前からも平氏関連の遺構の検出が期待されたが、全体として擾乱が多かったこともあり、平氏関連の遺構と思われるものはわずかであった。

平安時代末～鎌倉時代初頭の土師器皿が70枚以上出土した。廐棄土坑と考えられる遺構や、擾乱中からも同時期の土師器皿が42枚以上出土している。また、第1遺構面からは山城系の瓦が出土している。このことから、後世に擾乱され破壊されてしまったが、福原京関連の遺構が存在した可能性を考えることができる。今後、調査が進むことが期待される。

今回、遺構に伴って出土した遺物ではないが、播磨産の軒平瓦や「半折曲技法」で製作された山城産の軒平瓦が出土した。いずれも、12世紀末～13世紀初頭のもので、これは祇園遺跡第15次調査でも同範のものが出土している。時期としては、安徳天皇が福原京遷都を行った時期と重なる。このことから、祇園遺跡、雪御所一帯と平氏との関りを考える資料を得ることができたと考える。

調査区を南北に通る溝（SD101）を検出し、古墳時代～12世紀末の遺物が出土しており、最終的に埋没したのは12世紀末であると考えられる。

明治19年測量の仮製図から、福原周辺には土地区画の軸線が2つの方向を確認することができる。1本は、古代の官道である山陽道を基準にしたもので、N35°Wである。もう1本が、荒田台地上にN17°Wで区画する軸線である。建物や溝の遺構はそれぞれ基準ライン±6°程度に収まる。祇園遺跡第18次調査で検出した並行する溝SD209・210はN13°W、今回の調査で検出したSD101はN19°Wであった。このように、荒田の台地上ではないがこの周辺においては、平

安時代末期に、新内裏が建設された荒田台地上の軸線に合わせた土地造成が施工された可能性が考えられる。

第2節 平安時代末期の雪御所遺跡周辺について

平安時代末期になり、雪御所遺跡は歴史の表舞台に登場することになる。平清盛による別業の造営、治承四年（1180）の「福原遷都」など、一連の平氏政権の動向によるものである。

仁安三年（1168）、平清盛は出家し、福原の雪見御所に隠居する。この御所に、後白河法皇の度々行幸されたことが古記録から知ることができる。その後、治承三年（1179）の政変を経て、翌年には「福原遷都」が起こる。約半年の間、後白河法皇・高倉上皇・安徳天皇の三帝が福原の地に滞在していた。この、雪御所遺跡周辺は雪見御所の推定地となっている。

雪御所遺跡の東隣に位置する祇園遺跡では、過去の調査において平氏に関連すると考えられる遺構を検出しており、12世紀後半の短い期間において大規模な造営が行われ、京都系土師器皿や陶磁器の優品が消費されていたことが明らかとなっている。

今回の調査では11世紀末期に属する土坑、同時期に埋没したと考えられる溝を検出した。また、出土遺物としては京VI期新～京VII期古段階に当たる土師器皿が70枚以上出土した。

雪御所遺跡における調査では、用途不明遺構でない遺構として検出できた同時期の遺構は今回が初めてである。過去の調査において、平安時代末期の遺構の存在が疑問視されていたが、今回の調査において平安時代末期に雪御所遺跡の地域でも開発がされていた可能性が示された。

遺跡名としては、雪御所遺跡と祇園遺跡は分けられているが、弥生時代後期末～古墳時代は一つの集落範囲で、平安時代末期においても福原宮に関連する開発においては、福原京の範囲内に両遺跡の範囲が収まっていたと考えられる。そのため、雪御所遺跡の調査が今後進むにあたり、祇園遺跡と一緒に遺跡の内容を考えていく必要があると考えられる。

第3節 おわりに

今回の調査では、弥生時代後期末～古墳時代後期の東西に延びる溝、竪穴建物等を検出し、平安時代末期～鎌倉時代初頭の土坑や土地区画のための溝と考えられる遺構を検出した。

調査区全体として、後世の攪乱が多く、出土遺物の大半は弥生時代から12世紀末の遺物が混在する自然堆積層からの出土であった。また、5次-3調査は旧校舎の基礎等により削平されており、遺構がほとんど残っていなかった。

第1次調査、第2次調査で確認された石垣・石列は、今回の調査では確認できなかった。

今回、弥生時代後期末～古墳時代中期の竪穴建物を検出したことや、出土遺物からも祇園遺跡周辺に形成されていた集落の一部であった可能性を示すことができた。また、平安時代末期～鎌倉時代前期には、福原京遷都の際の土地造成を施工されようとした痕跡と考えられる遺構を検出し、京都系土師器皿や山城産瓦などの遺物が出土したことにより、これまでに指摘してきた平家一門との関連を考える成果を得られたと考えられる。

雪御所遺跡は、まだまだ一部しか調査がされていない遺跡である。今後祇園遺跡と共に、より調査が進むことで、弥生時代後期～古墳時代の集落の範囲および平安時代末期～鎌倉時代前期の様相が明らかになっていくことが期待される。

写真図版

写真図版1



調査地遠景（北から）



調査地遠景（南西から）



1～8区第1遺構面全景（南から）

写真図版3



SK101遺物出土状況（北から）



SD101（北東から）



1~8区、13~14区第2遺構面全景（空中写真、上が北）

写真図版5



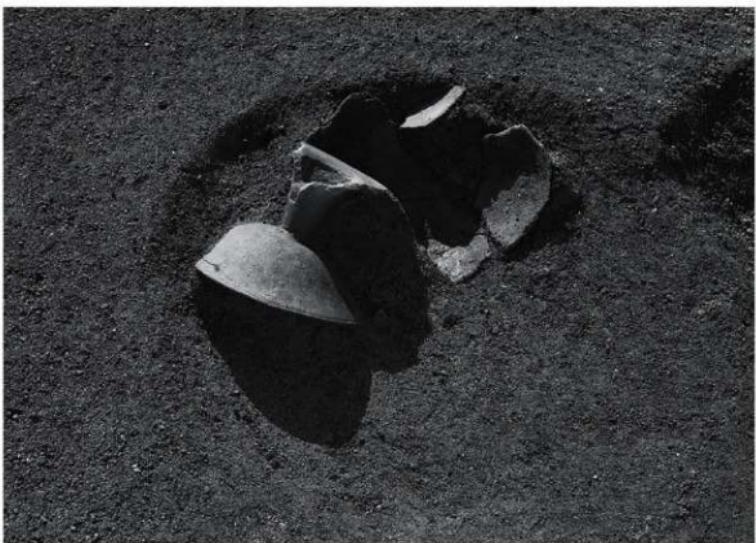
SB201 (北から)



SB201遺物出土状況 (西から)



SB202 (南東から)



SK203遺物出土状況 (北から)

写真図版7



SD201（北東から）



SD201最終埋土遺物出土状況（南西から）



9・10区第2遺構面全景（北から）

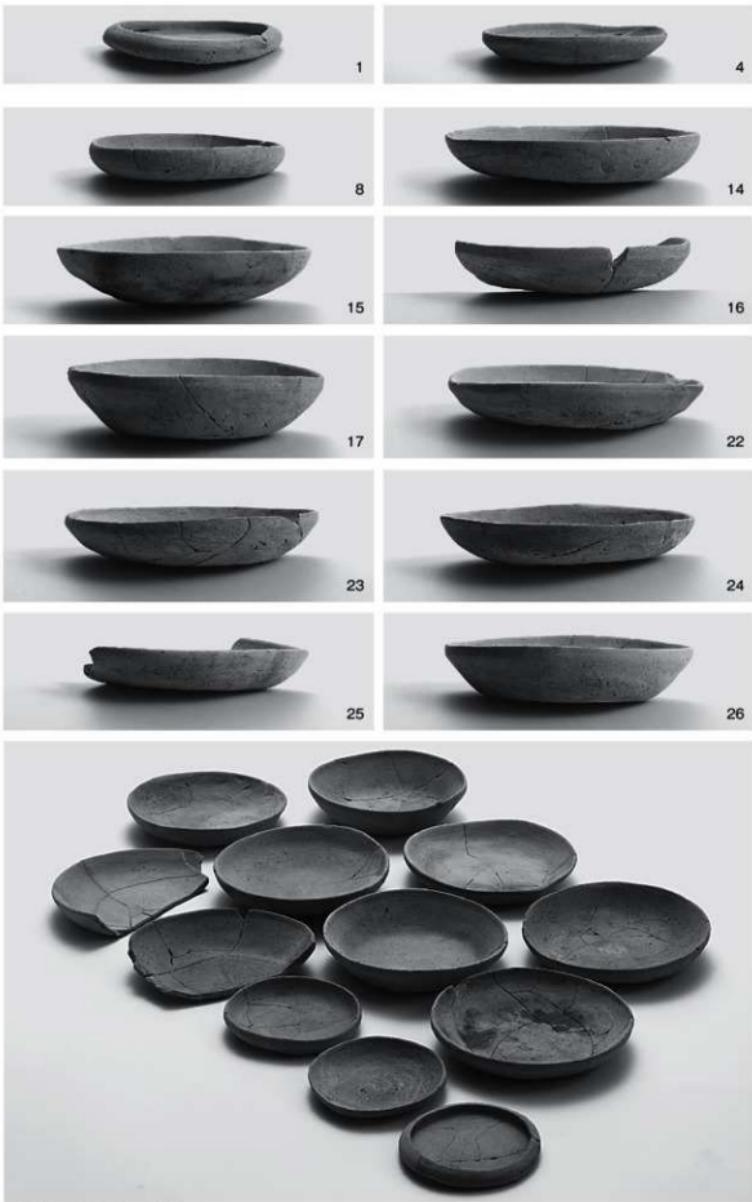


9区SD201（東から）

写真図版9



SK101出土遺物



遺構に伴わない遺物



第1遺構面出土瓦



SB201出土遺物



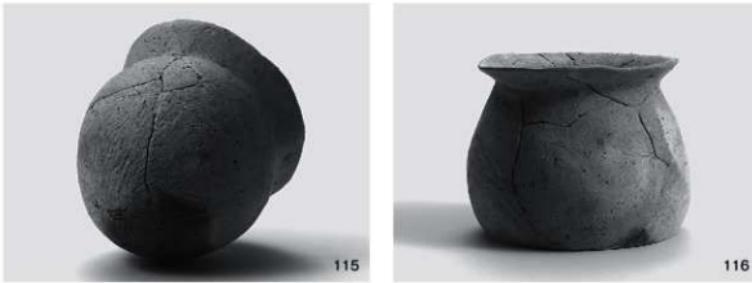
117

109

115

116

SB201出土遺物





119



118

SB202出土遺物



127

SB202出土遺物



120



121



123



125

SB202出土遺物



145



146

SK203出土遺物



134



135



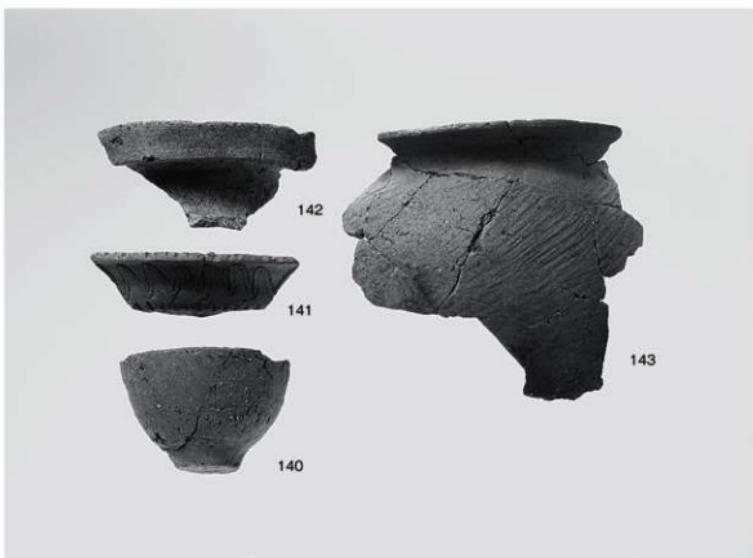
138

SD201出土遺物

写真図版15



SD201最終埋土出土遺物



SD201出土遺物



148



149

SX205出土遺物



第2遺構面出土遺物



154



155

第2遺構面出土遺物



163



167



156



170



175



166



168



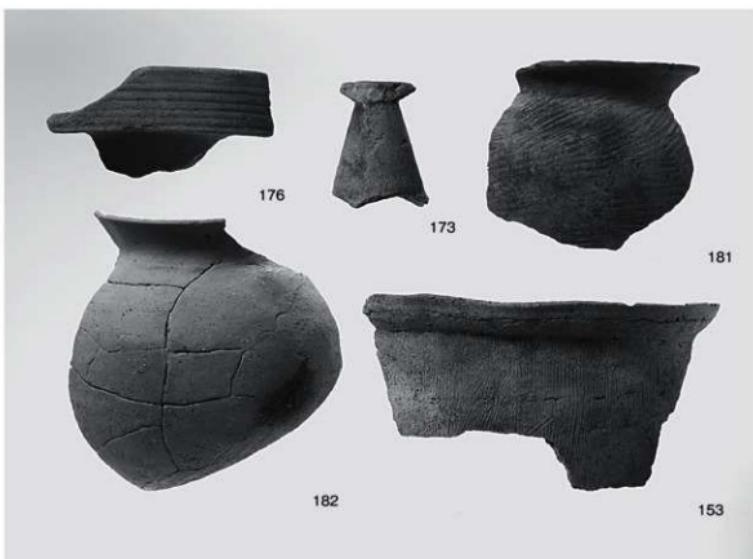
174



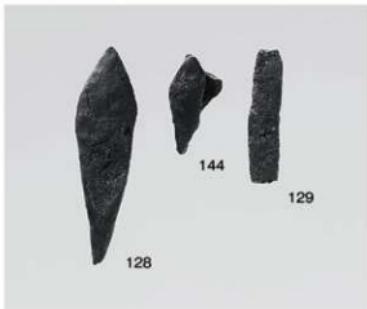
169



179



第2遺構面出土遺物



SB202・SK203出土鉄製品

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ゆきのごしょいせきだい5じちょうさはくつちょうさほうこくしょ							
書 名	雪御所遺跡第5次調査発掘調査報告書							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名	加納 大誉(編・著)							
編 著 機 関	神戸市文化スポーツ局							
所 在 地	神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel 078-322-5799							
発 行 年	西暦2022年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
雪御所遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区雪御所町 1丁目1-61・62 13番1	28100	2-16	34度 41分 22秒	135度 09分 54秒	20200924～ 20201126 20210201～ 20210212 20210303～ 20210311	延べ1446m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
雪御所遺跡	集落遺跡	弥生時代～古墳時代 平安時代		弥生時代末～古墳時代の竪穴建物、土坑、柱穴、溝、平安時代末の土坑等を検出した。		弥生土器・土師器・須恵器・石器・鐵器		
要約								
平安時代末期の土坑から京都系土師器皿が出土し、隣接する紙團遺跡との関連がうかがわれる。 弥生時代後期から古墳時代の竪穴建物を検出し、紙團遺跡と同一の遺跡である可能性が考えられる。								

雪御所遺跡第5次発掘調査報告書

令和4年3月 印刷

令和4年3月 発行

発 行 神戸市文化スポーツ局文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-5799

印 刷 交友印刷株式会社
神戸市中央区港島南町5丁目4-5
TEL 078-303-0088



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

City of Design
KOBE

Member of the UNESCO
Creative Cities Network
since 2008

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。